

糞新聞（仮）

冨谷 羊

ダースベイダー卿、天誅！

「十七日水曜日、込み合う学食内で飯を食い終わったにも関わらずペチャクチャと無意味でどう考えても脳の足りない内容の話を食堂中に聞こえる大声でしている男女何名かの団体、おまけにこいつらときたら鞆置いとく用の椅子も占領しており、学食のおばちゃんに「待ってる人もいるから場所空けたげてくれへんかな」と言われても「えー友達くるから、ていうか鞆下おいたら汚れるやん」とのたまって、また会話に戻りゲラゲラ笑っている。死ぬほど腹立つ。

記者は学食でカレーのLLサイズを注文してスマートにこれを食し、外のベンチでコーヒーでも飲もうと思っていたのにこういう輩が席を占領するもんだから座れない、むかつく、つうかその鞆にはどう考えても勉強道具入らねえだろアホ、と思っていた。でも大勢いるし、記者が「どけよ」などと言おうものなら、女の手前はりきった雄猿にえらい剣幕で恫喝されて、記者は涙目になって「うけるー」とかありきたりな、でも非常に傷つく言葉を背中に食堂を後にしなければいけないのは目に見えている。そんな辛い目にあうなら、はじめから外で値段の割にボリュームの足りない豚焼き肉弁当を買って、野菜生活飲みながらベンチで猫でも見ながら食すしかないのだろうか、無念、と思っていた矢先の出来事であった。

「天誅でござる！」という大声とともに学食内に一人の男が闖入した。この男こそが誰を隠そう、かのダースベイダー卿であった。お馴染みのマスクをかぶっているところからも間違いはないだろう。だが、まだ肌寒い四月にも関わらず、黄色のけげげしいアロハシャツとエメラルドグリーン色の膝上の短パン、足元はなぜか裸足という極めてラフな出で立ちのベイダー卿の手には、これまたなぜか緑色に光るライトセイバーが握られていた。おかしい、と記者は気付いた。フォースの暗黒面に魅入られたベイダー卿が操るのは、赤く光るライトセイバーのはずである。しかし直後、我々はその緑色に光るライトセイバー、ジェダイ騎士のライトセイバーの意味に気付かされるのである。

突然ベイダー卿にお目通りする羽目になった、記者を含む食堂の学生諸君は一様にポカンんとしていた。当然である。アロハシャツを着たベイダー卿が現れたらその姿に目を奪われても無理はない。会話の声が止まり、皆の箸やスプーンが止まった。そんな中、当のベイダー卿は多くの視線が自分に注がれていることを存分に堪能していた。おそらくマスクの下には恍惚とした表情、たとえば理科の若い女の先生が「マンボウは卵を何万個産むでしょう」「先生何ってー？」「だからマンボウが…」「違うそのあとー」「何万個？」「えー聞こえへん」「なんまんこ！」と何度も聞き返してうっとりしている男子中学生のような表情があつたに違いない。

そうして十分に視線を味わったベイダー卿はふと何かを思い出したように静かな学食内を歩き始めた。食堂内は人、人、人で混み合っていたが、ベイダー卿の前には海を割るモーゼのごとく道ができる、みなが彼の通る道を開けて、避けていた。

ベイダー卿は突然立ち止まり、おもむろに近くのテーブルに座る男女に向き直った。このカップルは目の前の暗黒卿が気になりつつも目を逸らし、できるなら関わり合いになりたくないな、と思っていたに違いない、同じ状況に置かれたら記者もそう思うだろう。しかしベイダー卿は二

人を見下ろして立ち止ったままである。気まずい沈黙が流れる。

学食の皆の注目の中、夏真っ盛りの恰好をした暗黒卿は突然、手にしたライトセイバーを振り上げた。記者は思わずあっと声を上げたが声にならなかった、カップルの男のほうがつっさに自分の頭をすくめた。しかしベイダー卿はライトセイバーである方を指しているだけであった。…食器返却口である。カップルの食器はもう空であった。ブウン…ブウン…と音をさせているその光の指す意味がわかるが早いか、女の方は食器を持って片付けにいった、慌てて男の方も続いていた。

ベイダー卿はその姿を見送り、またぺったぺったと裸足で別のテーブルの前へ行き同じことを続けた。ターゲットにされた学生は慌てて食器を返却しに行った。それだけではない。ダースベイダーに支持されるのを待たずして、にわかにあちらこちらで学生たちが席を立て、食器返却口に殺到した、あんな変な奴と関わり合いになりたくない、そんな恥ずかしいことは耐えられない、という心境であったのだろう。

だがその沈黙の迫力、暗黒卿のフォースの力の届かない愚か者もいた。それは先ほど記者が脳内で侮辱をなめさせられた、あの鶏のような頭をした男女の一団である。多くの賢明な学生がベイダー卿の世直しを受け入れ、食ったら片づける、という実に美しい合理的な流れを作り出しつつあるにも関わらず、依然としてその一団は食堂内で広い一角を占めたまま、キィキィと声高にわけのわからない話をしながら低俗そうな笑い声をまき散らしていたのである。

当然そのような一団を見逃すベイダー卿ではない。べたしぺたしと足音高くその猿の群れへ向かう卿の姿を食堂の誰もが見守った、猿どもを除いて。最初にその異様な雰囲気気付いたのはグループの中の女、鼻が上を向いた、眉毛が薄くて頭が悪そうな女である。チラとベイダー卿に目をやった、直後また会話に興じた。

明らかにベイダー卿は頭にきている様子だった。コーホーと大きく深呼吸をしたかと思ったその直後、何も言わずいきなりベイダー卿はその一団のテーブルを蹴り上げたのである。ガッシャーんと大きな音をたててひっくりかえった机から、食器が落ちる、饅頭やラーメンの汁がこぼれる、悲鳴が上がる。

突然のことに驚いて、女が慌てて立ち上がるものだから置いていた鞆が床に落ちて、ラーメンの汁に浸かった。「ちょ、ありえへん！」と女が拾い上げようとしたその瞬間、それよりも早くベイダー卿が「天誅！」の声とともにおもっくそ鞆を蹴り飛ばしたものだから鞆は食堂の外へ飛んでいくわ、蹴り上げた勢いで女の顔にラーメンの汁はかかってまた悲鳴が上がるわ、思いのほか奇襲が上手くいき、調子に乗って勢いづいた卿は別の机も蹴り倒すわもう無茶苦茶になった。

しばらく呆然として暗黒卿の傍若無人の振る舞いを見ていた男たちが、ハッと我に返り「なにしとんねんコラ」「殺したる」「待てやオイ」とベイダー卿につかみかかろうとした。

その殺気を敏感に感じ取ったベイダー卿は手近にいた男の頭を一発ライトセイバーでブォン、としばきあげたのち、後はわき目も振らずに物凄い速さで食堂を後にした。四人いた男のうち、しばきあげられた一人は出遅れ、もう一人は饅頭を踏んづけて思いっきりすべり、残りの二人が卿を追跡した。残された女たちは茫然としたり泣き出したりと、さながら戦場のようであった。

他の学生も、あつけにとられているものや、食事をそこそこに出ていくものや、だが異様に静ま

りかえっていた。これがダースベイダー天誅事件の一部始終である。その後卿の行方は誰も知らない。

しかし記者の調べではその後食堂では食ったら片づける、というマナーが徹底されているという、ありがとう！ダースベイダー！シスとともにあらんことを！」

その記事とともに載っていた写真には黒いマスクをかぶった、ハワイ旅行中でもこんなに馬鹿な恰好をしたくないな、という恰好をした男が映っていた。その衣装のひどさは白黒写真でも伝わってくる。ピチピチの半ズボンからでてくる太い足は力いっぱい食堂のテーブルを蹴り上げていて、テーブルは男の肩ぐらまで跳ね上がっていた、どんな力だよ、足大丈夫かよ。まわりの変な髪形をした男女も物凄い顔をしている、恐怖に凍りついていたっていう感じだ。

これ以上ない完ぺきなシャッターチャンスをとらえたその写真は、映画のポスターのようで、僕は思わず胡散くせえなど声に出してしまった。

糞新聞、と書いてあった。

僕は四月から大学生になり、地元を離れて京都に引っ越した。実家から付いてきて、最低限の家具やら何やら買い揃えるのを手伝ってくれた母と兄貴が「元気でな」と部屋から出た瞬間、僕は思わずガッツポーズをした、天井にぶつからないくらいの高さの昇龍拳を放った。これから念願の一人暮らしが始まるのだ、AV見るのにも親の寝静まったのを待ってコソコソ緊張感のあるオナニーをしないですむのだ、ていうか何がAVだよ、彼女をこの部屋に連れ込んでやり放題だ、セックス三昧だ。僕はまだセックスどころかキスもしたことなかった。彼女はいたことがある、中学の時に三週間だけ。喋ったこともない女の子からいきなり「一緒に帰ってくれませんか」と言われて、別れ際に告白されて、次に一緒に帰ったときに別れ際に「やっぱり違う」と言われて、よくわかんないうちに振られた、それを一回にカウントしていいなら、過去に付き合ったことのある女は一人だ。でもAVいっぱい見てきたし、友達から色んな話を聞いているから童貞ってばれないだろう、いや、でも初めは彼女以外の女の子と練習した方がいいかな、合コン行きまくらなきゃな、などと馬鹿なことばかり考えていた。

腹が減ったのでスーパーで食材を買って、生まれて初めて晩飯を作った。完成した焼きうどんは、麺はのびきってて、キャベツは焦げてるし、豚肉もなんだか獣くさくて、母の作るのとは雲泥の差だったけどサイコーに美味かった、これからブラボーな一人暮らしが始まるんだ、友達百人作るんだ。

引っ越しした翌日に入学式があって、式の前にあちこちうろうろしてみたが僕の学校からきてるやつはいないようだった。天涯孤独ってやつじゃねーか、早く友達つくらなきゃ、と焦って勇気を振り絞り、入学式でとなりに座った男に話しかけてみたところどうも話がかみ合わないな、と思ったら中国からだか台湾だかの留学生（しかも三年次編入だからちょっと年上）だったようで、僕はエヘへと曖昧な笑顔を浮かべてごまかした。最大限の勇気を込めた出鼻を完全にくじかれた僕は心が折れてしまって、その日は一人で帰った。

誰もいない部屋に帰って、その晩はいっぱいもらったサークルのビラを眺めながら「僕、友達できるのかな」と急に寂しい気持ちになった。食材がまだあったので昨日と同じように焼きうどんを作った、昨日よりは上手に出来たけど不味かった。一人暮らし、寂しいなあ。

翌日行われた学科のオリエンテーションは大学の大きな教室に百二十人くらい、アルファベット順の出席番号で順番に座らされて新品の学生証をもらったり単位や進級についての説明なんかを聞いたりするらしい、ちょっと退屈そうだった。

サークルの出店とか行きたいなあと考えながら周りを見回すと男よりも女の子がかなり多かった。文学なんて全然興味がなかったけど、友達が文学部には女が多いと聞いて僕は進学を決めた、作戦通りである。にしても隣の金髪野郎、ヤンキーかよ、こんな奴も大学受かるのかよ、こえーよ。

簡単な説明が終わり、配られた書類に名前や連絡先なんかを書いて提出する頃になって、隣に座っていた金髪が「なあ、悪いけどペン貸してくれへん？」と話しかけてきた、こえーよ、ど

金髪のうえに関西弁だよ。断ると何されるかわかんなかったのだから「いいよ」とオープンキャンパスでもらったペンを金髪に貸した。

「男少ないよなあ」と金髪がペンを返しながらかに僕に話しかけてきた、こえー。ペンを受け取りながら僕は「そうだね、文学部だしね」とだけ返事した。

「キミ、下宿生なん？地元どこ？」

え？なに？カツアゲとかされるの？僕カツアゲあったことなかったのになあ、弱そうに見えたのかなあ、違う、普通に聞かれてるだけだ、多分。むしろ友達フラグだ。金髪ヤンキーと？友達？こえーよ。

「僕？下宿生で、地元は愛知県、名古屋の近くに住んでた」

「てことは名古屋ではないんや」そう言って金髪は少し笑った。お？こいつ馬鹿にしたな？

「俺京都やねん、やから実家から通い。下宿かあ、ええなあ、AV見放題やん」「…それ僕も引っ越し初日に全く同じこと考えたよ」「やんな！羨ましいわ、早速何か借りたん？」「それが、ビデオ屋行って三本くらい選んでおっさんのいるカウンター持っていったら、「会員証を作ってください」みたいなこと言われていろいろ書こうとしたら新しい住所わかんなくて結局ダメだった」「アホやん」「うん、わかりませんってカウンター持っていったら受付がお姉さんになって「じゃ、これ戻しておきますねー」って、僕の借りようとした「男喰い！極痴女四時間SP」とか持って行っちゃった、恥ずかしい思いしただけだったよ」「アッハッハ、おもしろいなキミ」お、笑った。ていうか金髪意外といいヤツじゃね？笑顔意外とキュートじゃね？

「は一、おもしろ。いや、でも、男も少ないし、仲良くやろうや。俺向井恭介っていうねんけど、名前なんていうん？」

「あ、工藤吉信です」そう言って僕は手元の書類を向井に見せた。

「工藤吉信…何て呼んだらいい？」

「何でも、工藤でも吉信でも、高校の時はヨッシーだったけど」

「いやいや、ヨッシーじゃあ普通過ぎておもんないやろ」そう言って向井は僕の書類をじっと見た。さすが関西人、おもしろくない呼び方は認めないのだ、僕はちょっと感動した。「どんながええねやろ」と向井は考えていた、そして遠慮がちに、

「…トーキチ、やな」と言った。

「トーキチ？なんで？」

「工藤の藤と吉信の吉をあわせて藤吉、トーキチ、戦国武将みたいでカッコええやん、おいサル！みたいな」

「おいサル！じゃねーよ」僕は勇気を出してつつこんでみた、こえー。

「ウヘヘ、じゃあ自分トーキチで決まりな」僕のつつこみは悪くない感触だった。

正直いいあだ名だとは思えなかったけど、いいじゃない、新しい名前。なんだか新しい生活が始まるって感じ、トーキチ、今日から僕はトーキチだ。あ、こいつのこと何て呼んだらいいだろう？金髪？ヤンキー？呼べるか、こえーよ。

「じゃあ向井くんは何て呼べばいい？」

「俺？向井でいいや」

金髪なのに呼び捨てでいいんだ？いいのか？呼び捨てで呼んだ瞬間、調子乗んな、とかいって怒りださない？大丈夫？僕は内心で恐る恐る思いながら、

「あ、そう、自分は普通なのね。じゃあ向井って呼ぶよ」と言うと、

「おっけー、トーキチ」と向井が笑顔を返した、友達成立である。

そこまで話している途中で前の席の女の子から新しい書類がまわってきて、会話は中断した。また書類に名前や住所を書いたり、「年間百二十四単位のうち、専門課程で最低二二単位を取得し…」なんていう説明をよくわからないので聞くともなく聞いていたりするうちにオリエンテーションも終盤に差し掛かった。

「では最後に学生生活課から…」と聞いて僕はホッとした、しばらく前から寝ていた向井も「最後に」の言葉に反応したらしく目を覚ましたようだった。

「みなさんご入学おめでとうございます、学生生活課からご案内させていただきます。この薄いブルーのプリントを見てください」と壇上の女の人が一枚のプリントを取り上げると、教室の中の一〇〇人くらいが一斉にプリントに目を落とした。プリントには「過度の飲酒に注意」だとか「セクハラ・パワハラ相談室」だとかの文字が載っていた。

「だいたいお伝えしたいことはこちらに書いてあるので、熟読の上保管しておいてください」だったら時間とるまでもねーじゃねーか、早く帰らせろ。「ですが、このプリントに書いてないことで一点、ご注意を申し上げます」書いてないこと？書けばいいのに。

「糞新聞を購入しないようにしてください」

くそしんぶん？確かにそう聞こえた、思わず隣の向井と顔を見合わせた。向井も口パクで「くそしんぶん？」と言って不思議そうな顔をしていた。くそしんぶん？

教室の「？」という空気を察知してか、壇上の女の方はチョークを手に取り黒板に「糞新聞」とデカデカと書いた。やっぱり「くそしんぶん」って言ったんだ。教室中の「??」に答えるために女の方は解説をくわえた。

「糞新聞というのは、学内のどこかの団体が発行しているらしいフリーペーパーの一種のようですが、内容的に公序良俗に反した様子で、みなさんの学生生活を台無しにするかもしれないものです。一種の悪徳商会や宗教勧誘のようなものと思ってください、大体そのくらいの警戒心を抱いてください。くれぐれも糞新聞には関わらないよう、最後にご注意申し上げます」

くそしんぶん？結局なんのことだかさっぱり分からなかった。

学科のオリエンテーションが終わった後、向井に「このあと何かある？」と聞かれて「今日はこれで終わりじゃない？また明後日授業登録があるくらいじゃなかったっけ？」「ちやうちやう、アレやったら一緒にサークルまわったりしようや」「あ、そーいうことか」「一人でまわるのも勇気いるやん？」え？何言ってんだこのヤンキー？「いーよ、僕も他に友達いないし」友達、でいいんだよな？「よっしゃ、ほんじゃどこ行く？」

向井と歩いているとなんだか僕まで強くなったみたい、ていうかイケてる感じに見えるんじゃないかなと錯覚した。向井は金髪で、座ってた時はわからなかったが背も高く、ちょっとずつ打ち解けてきたからわかったのだが、なかなかキュートな笑顔が似合う男だった、金髪なのに。でもヤンキーっていうのは多分違ってたんだな、一緒に歩いてサークルの出店をまわりながら話しているうちに、僕はもうこえーよ、と思わなくなった。

向井は目立つので色んなサークルが声をかけてきた。運動系のサークルはもちろん、「バンドとかやらへん？」とか、「一緒に舞台に立とう！」とか。でも一番多かったのは派手な化粧をした、いわゆるテニスサークル（の皮をかぶったイベントサークルの）お姉さま方の「うちの新歓おいでーや」だった。僕は、おいおい、こいつだけモテてんじゃねーよ、とは思わなかった、むしろ向井のおかげで僕もいろんなサークルに声をかけられてちょっとうれしかった、僕は謙虚な人間なのだ、今はおまけでも全然構わないのだ。

「あかん、しんど」と向井が言ったので一休みしよう、と近くの学食へ向かったが全く席はなかった。もう一か所の学食も行ったがこちらも満員御礼、そりゃそうだ、ベンチも全部ふさがっていてそもそも学校中が満杯の人であふれかえってるのだ、お祭りなんだなあとって僕は頭上の桜を眺めた。

「しゃーないからマクドでも行こか」「マクド？」「マクドナルドや」「マックだろ」「え？マクドじゃないん？」「いや、マックだろ」という方言トーク（この「マクド」については別の人も四月の間にあと百回はすることになる）をしてから僕たちはバスに乗って四条まで出かけた。うお、都会！

「あー、つかれた」向井はビッグマックを二口くらいで半分まで食べて一息ついたようだった。さっき「それビッグマクドって言うの？」と聞いたが無視された、何だよ。

「俺あかんわー、ああいうの苦手かもしれへん」

「ああいうのって？」

「なんかごちゃごちゃと人に絡まれるの」

「そうなの？慣れてるもんだとばかり」

「そんなことないで、入学式の帰りとかもビラ一枚もらっただけやし、しかも総合格闘技研究会、ごっつい坊主のゴリラみたいな人やったわ」

たぶん先輩方もこんなデカイ金髪、ヤンキーだと思ってビビってるんだろう。

「男もやけど、知らん女に話しかけられたもの初めてや」

「でも今日いっぱいビラもらってたじゃん」

向井はポテトを一掴み口に放り込んで考えた、一口でけーよ。

「うーん、あれちゃう？トーキチおったからちゃう？」

「え、マジ？そうなの？」僕はちよつと得意になった、悪い気しない。

「俺、普段一人やとみんな避けていくねん、でも今日はトーキチ一緒やったし新入生として認識してもらえたんちゃうかな、「弱そうなツレおるしあいつ大丈夫やろ」みたいな」

「弱そうって、親しみやすいつて言えよ！」

向井は、わりーわりーと言って笑った、チャーミングな笑顔だ。

「でも、俺友達できひんかなと思って心配やってん、ホンマの話」

「なんで？」

「だって金パやしデカイし、顔もちよつと怖いやん？」

まーね、と喉まで出かかったが僕はズズッとコーラを飲みながら、そうかな？と言ってあげた。

「やし、間違いなく他人から話しかけられることはないなど、こっちからいかなあかな、と思つててん」

「そんで？」

「今日のオリエンテーションで誰か話しかけたろって決心しとつてん。そしたら隣にトーキチ座つてるやろ？あ、こいついつたろ、思つてん」

向井の「こいついつたろ」は洒落にならない気がする、僕はやっぱり財布を出すべきだったんじゃないかと思った。向井にそういうと、

「ペンだけ準備しといてくれたらいいわ」と言った、なかなか気の利いたこと言うじゃないか。

「でも隣がトーキチでよかったわ、女ばっかやから隣女の可能性が高かったわけやろ？女に喋りかけたり苦手やわ。あとチャラチャラした感じの男も話しかける気せえへんな」なんだか意外だ、自分は金髪のかせに。

「やから、トーキチ、弱そうっていうのもホンマやけど、確かに親しみやすくはあるな、なんつうか、人が油断する？警戒心抱かせへん、みたいな」

「それ弱そうって言ってるのと同じだよ」

向井はヘツへと下品な声で、でもキュートな笑顔で笑った。

それから僕たちはマクド（マック）でサークルのビラを広げながらああでもない、こうでもないと言い合った。これまた意外なことに向井はイベントサークルを嫌った。「だってあいつらアホそうやん」。僕としてはああいう派手そうなお姉さんと是非知り合いになって、何かエロいハプニング的なものを期待していたのだが、一人では関わり合いになる勇氣はなかった。「トーキチ、お前アホやろ」。

あれこれとサークルのチラシを眺めて、僕たちはいくつかの団体をピックアップした。新入生歓迎花見会を色んなサークルが企画していて、日程が被らないように参加のスケジュールを立てた。流れで、当然二人で参加するつもりになっていた、僕は怖い先輩やイキがった同級生に絡まれないように、向井はビビられないように。そうやって色んな新入生歓迎会に参加して、僕は

雰囲気よさそうで女の子の可愛いサークルに入ろうと考えていた。向井は何を考えていたかは知らない。

なんとなく話がまとまって、おかげで会話のほうは手持無沙汰になってしまったので、ざっと目を通したチラシを一枚ずつ眺めていた。その中で一枚のチラシにふと手が止まった。「糞新聞、執筆者募集」。

「くそしんぶんだって」僕はチラシを向井にも見せた。

「ああ、さっき言っとったやつか」向井も不思議そうな顔でチラシを眺めた。

「何だったんだろうね、これ。学生生活課の人が気を付けてくださいって言ってたし」

「説明もよくわからなかったしな、らしい、とか、かもしれない、とかばっかやったもん」

「正体不明の団体なのかな、ちょっとこえいな、ていうか気持ちわりい」

「ちゅうかそれ渡してきた奴どんなやつやったん？」

「覚えてないよ、もらったことすら気付かなかったんだもん」

「余計きっしょいな」

「どっかに出店とかだしてるのかな」と僕は「サークルブース案内」という地図を広げたが「糞新聞」という表示はどこにもなかった。

「やっぱ正体不明なんやな、こわ」向井みたいなやつでも怖いのか。でも僕は少し興味があった。

「でもすごくない？学校にマークされてる新聞部だよ？どんな記事載ってるんだろう」そういう僕のことを向井は怪訝な目で見ながら、

「どーせアホなこと書いて、それに釣られてきたやつをマルチ商法とか新興宗教とかに勧誘するんちゃう？」といった。なるほど。

「とにかく平穩で楽しい学生生活のためには、こういうキモいのは関わり合いにならんのが一番やで」

向井はそう言いながらチラシをくしゃくしゃにしてトレイにおいた。僕はちょっと気になったが、まあ向井みたいなやつでも警戒するんだから、関わり合いになったところで少なくとも女の子にモテそうな感じはしない、糞新聞のことは忘れることにした。

それからケータイのアドレスを交換してそれぞれ帰ることにした。去り際に「またなー」と向井はキュートな笑顔で手を振っていた。仲良くやれそうさ。

帰ってからさっそく向井にメールして、翌日の昼前に学校で待ち合わせた。図書館の前で人ごみにまぎれながら、色んなサークルにビラを持たされながら待っていると、向こうの方から背の高い金髪のヤンキーがやってきた。

「おっす、…なんやお前、えらい大人気やん」向井は僕の手元のチラシを見て言った。彼は難なくチラシ攻撃をすり抜けてきたらしくその手には一枚のチラシも持たされていなかった、多分声すらかけられなかったのだろう。昨日は僕が彼の印象をマイルドにしていたことは間違いなさそうだった。

マックで作戦を立てたとおり、相変わらずの人混みを掻き分けながらあちこちのサークルを回って連絡先を残してきた。連絡先を書くたびに、先輩達は若干向井にビビりながらも、ずいぶん喜んでくれてなんだかいことをしている気になった。

大体のサークルを回り終えて、僕たちのリスト最後のサークルのブースに「授業登録相談乗ります」と書いてあった。それを見た向井が、

「そういえば時間割作らなあかな」と僕に言った。

そうだそうだ、昨日のオリエンテーションで単位の話とかしてた気がする。途中から複雑すぎで後で誰かに聞こうと思って諦めたんだ。でも向井も寝てたことだし役には立たなさそうだが、僕には誰か、のあては無かった、多分向井にも。

そこでさっそく向井が、

「時間割ってどうやってつくるんすか？」

と、目の前の茶髪の男の先輩に尋ねた。茶髪先輩は、

「え？簡単やで、取りやすい授業とか教えてあげるわ、君ら何学部？」とニコやかに聞いてきたので今度は僕が「文学部です」と答えた。それを聞いた茶髪先輩はニコやかさが三割くらい減った。

「文学部か…誰がおったっけ？」と茶髪先輩はちょっと困った様子で、隣にいた黒ぶちメガネをかけた別の先輩に聞いた。聞かれたメガネ先輩は「アケミちゃんとか文学部ちゃうかったっけ？呼ぶわ」とアケミちゃんに電話した。茶髪先輩は「俺ら二人とも経済学部やねん、文学部の子呼ぶからちょっと待ってな」と苦笑いした。

ほどなくしてアケミちゃん先輩が到着した。「この子やねん、文学部の」とメガネ先輩が僕たちを紹介した。アケミちゃん先輩はちょっと迷ってから僕の方に、

「君ら文学部なん？学科は？」と尋ねた、向井は文学部っぽくなかったらしい。それかちょっとビビられたか。

「日本文学科です」と返事すると、アケミちゃん先輩も困った顔になって、

「日文かー、あかなあ、うち英文やもん」と言った。さっきから困らせてばっかだな、僕たち。でも仕方ないので僕も困った顔をした。その僕を見たせいか、アケミちゃん先輩は、「ちょっと待ってな、一人日文の知り合いいるから聞いてみるわ」とケータイを取り出した、やりい。サークルの先輩→学部の先輩→学科の先輩、と数珠つなぎに手掛かりに近づいていっ

てちょっと面白い、ていうかこの人たちいい人だな、サークル入ってほしいからかな。アケミちゃん先輩ちょっとかわいいな、胸小さいけど。

「うん…うん…縁生棟の三二一教室な、わかった、ありがとう」とアケミちゃん先輩は電話を切って、僕の方を向いて、

「縁生棟の三二一教室で日文生向けの授業登録相談やってるって、そこにいる人わたしの知り合いやしそこで聞いてきたらええよ」といった。女の人関西弁かわいいな。

アケミちゃん先輩に場所を教えてもらって、僕たちはお礼を言って縁生棟へ向かった。アケミちゃん先輩は「新歓来てな」と言ってニコっと笑った。向かう途中、僕が「アケミちゃん先輩ちょっとかわいかったな」というと向井は「胸が小さい」と切り捨てた。同意。

縁生棟は敷地の隅っこの方にある、ちょっと古い校舎だった、三二一教室ってことは三階か。エレベーターがついてなかったなので階段を上った。

なんだか静かで、そこではサークルの勧誘があまり行われていないらしく、ってそりゃそうだ、迷い込みでもしなくちゃこんな隅っこの校舎、おまけに三階まで新入生はこない、なんか薄暗いし。でも探し当てた三二一教室の前には「日文学科履修相談会↓」と下手糞な手書きのコピー用紙が貼ってあったので多分間違いないだろう。

「間違いないよな？」僕は向井に聞いた。

「ここだけ電気ついてるし、あってるやろ」

それからじゃんけんに負けた向井がノックして先に入ることになった、僕は後ろからついていく。向井はドアをコン、コン、コンと三回ノックした。ドアの向こうから「どうぞー」という男の声がした。向井がドアを開けた、ドキドキ。

中に入った向井が「ここで日文の時間割…」と言いかけるのと同時に、「うお！スゲーの来たな！」という驚いた声が出た。たぶん金髪のデカイ男がにゅっと入ってくるのは想像してなかったらしい、でもえらいストレートだな、おい。

あいさつに割りこまれて思わず言葉につまった向井を、中の男が「あ、ごめんごめん、日文の履修相談会場はここだよ」と招き入れた。

教室は席が二十くらいある、いわゆる小教室で、中には教壇の位置にさっきの男がいるのと、窓側の席に一人女の子がいるだけだった。黒板には大きな文字で「日文研究会主催 履修相談会」と書かれていた。入口に貼ってあった下手糞な筆跡と同じだったので、書いたのは多分この男なのだと思う。

教壇の男はベロアの黒いハット？帽子をかぶって、メガネをかけて、白黒チェックのシャツに裾の擦り切れたジーンズ、足元は雪駄という出で立ちで、机には読みかけの文庫本が伏せてあった。この男がたぶんさっきアケミちゃん先輩の言っていた日文の知り合いというやつだろう、なんとなく胡散臭い男だ。そんであそこに座っている女の子は僕たちと同じ新入生だろう、チラッとこっちを見て、それからまた机のうえの授業資料に目を落とした、小柄で黒髪が似合う、でもふわっとした白のワンピースにブルーのカーディガンを着ていたので胸の大きさはよくわからない。

教室の入り口で棒立ちになっている僕たちに、帽子先輩が話しかけてきた。

「君たちアレかい？さっき英文のアイザワさんの言った人たち？」アイザワさんってアケミちゃん先輩のことだろうか。「多分そうです」と僕が返事した。

「おっけー…ああ、そんなとこ立ってないで好きなどこ座ったらいいよ…それとこれあげる」と言って帽子先輩は僕と向井にプリントを一枚ずつとカントリーマアムを一つずつくれた。

「そのプリントは日文の専門科目が載ってる時間割だから、僕がのお手製だよ」

向井はその言葉に、席にすわりながら「ありがとうございます」と言った、「いえいえどういたしまして」。

それじゃあ説明するからよく聞いてね、と帽子先輩は僕たちの前の席に座って、三十分ノンストップで、学科の単位システムと必要な授業、各教授の傾向と対策、試験の内容なんかについて一気に解説してくれた。途中、息継ぎと水を飲むとき以外はずっと喋り続けていた、聞く方がむしろ疲れた。でも昨日聞いたオリエンテーションの説明よりは、フランクで噛み砕いた説明だったからずっとわかりやすく、完璧とまではいかないけど、どうやって授業を組むべきか僕でもわかった。

「…以上、あとは時間割表使いながら自分で組んでね、わかんなかったら聞いてね、そっちのジュースは勝手に飲んでね、お菓子もどうぞ」と机のペットボトルとお菓子を指してから、帽子先輩はまた教壇に戻った。そして教壇の上のパイの実を一つ食べて、伏せてあった文庫本の続きにとりかかったが「あ、そうだ」と何かを思い出した。そしてまた僕たちの机の前まで来て、「申し遅れました、僕は日文学科二回生の津久本です、日文研究会の会長もやっています」と自己紹介した。

「向井です」「工藤です」と僕たちも自己紹介した。

「それとあっちの女の子は西条さん、新入生同士だから仲良くしな」と窓際に座っている女の子を紹介した。急に名前を呼ばれた西条さんは、慌てた様子でこっちを見ながら作り笑いを浮かべて会釈した、笑顔がぎこちないけど結構かわいい子だと思う。僕は「よろしくね」と控えめに言ってみた。西条さんはもう一度ぎこちなく笑って会釈してくれた。

そんな僕たちのちょっとハートフルな交流を余所に「日文研究会ってなんなんですか」と向井が津久本先輩に尋ねた。

津久本先輩は「え、君金パなのにな研究会興味あるの？」とニヤつきながら言った、こいつもしかして性格悪い？向井は「金パ関係ないでしょう」と苦笑いした。西条さんのほうをチラッと見たらちょっと笑ってた、さっきより自然に。

「うそうそ」そう言って津久本先輩は笑った。「研究会は学生有志が自発的に文学研究をする、まあサークルみたいなもんかな、学科所属の」「研究？」向井は興味津々だ。

「まあそれは名目上で、年に一本レポート書くくらいであとは好き勝手に不毛な文学談義とか漫画の話とかしてるだけだね。どっちかっていうとメインはこうやって新入生のお世話をしたり、別にある学生執行部っていう団体のサポートしてちょっとしたイベントやったりとかかな、ホラ、オリエンテーションあったでしょ？」

思い出した、そういえばこの人もあの日いた気がする、プリントとか配ってた。あのときはス

一つでもっとちゃんとした恰好だったから気付かなかったけど。

「まあ、そういうゆるーい団体。興味あったら仲間に入れてあげるよ、ていうか今年一人も入らなかったら僕、執行部と教授に死ぬほど怒られるんだけどね」と言ってへらへら笑った。そして「考えといて」と僕たちに研究会のチラシを渡した。

まだ渡してなかったらしく西条さんにもチラシを渡しながら、新入生三人に向かって、「別に研究会入らなくてもお世話してあげるから、なんかあったらそこの連絡先にいっておいで」と言ってくれた。いいやつじゃん、津久本先輩。「解決できなかったら逃げるけど」無責任だな、津久本。

それからしばらく僕たちはああでもない、こうでもない、といいながら時間割表と格闘していた。ときどき津久本先輩は読書を中断して、僕たちや西条さんの席まできてアドバイスをくれた。といっても西条さんのほうは時間割が大体出来ているらしく、津久本先輩と大学生活について何か話していた。

しばらくして津久本先輩が、

「お腹空かない？ どうせ学食混んでるから、購買で何か買ってきてここで食っていいよ」と言ってくれたので、時間割は一旦保留にして、僕たちはお昼ご飯を買いに行くことにした。

財布を持ってふたりで教室を出ていこうとすると、津久本先輩に、

「おいおい、薄情な男どもだな、西条さんも連れて行ってあげなよ」と声をかけられた。

振り返ると、またしてもいきなり自分の名前を呼ばれて驚いたらしい西条さんが津久本先輩を見てからチラッとこっちを向いた、目が合った、西条さんは慌てて目を伏せた、かわいいぞ。

僕たちに「女ばっかの日文で女の子に優しくない男は殺されて死ぬぞ」と言いながら、津久本先輩は西条さんの机の前に行き、「ほら、このチャラそうなお兄ちゃん達に連れて行ってもらいなさい」と言った、西条さんはまだはずかしそうにしていたが、

「西条さん、一緒に行こうや」と、向井に呼ばれて、慌てて「はい」と立ちあがった。

ちょっとビビってる？と思った僕は「大丈夫、こいつ金パだけど怖くないから、噛みつかないから」と場を和ませようと挑戦すると、西条さんは「そ、そういうわけじゃ…」と恥ずかしそうに笑ってこっちへ来た、かわいいぞ。

僕と向井が歩くうしろから西条さんが付いてくる恰好で三人で歩いた。購買までの道すがら向井と話しつつ、うしろの西条さんを気遣って話をふったりした、ミスター気配りとは僕のことだ、西条さんは五割がた僕に惚れてるに違いない。

購買は別の校舎にあったので外を歩いた。まだちょっと風が吹くと寒いけど、四月の太陽はあたたかく、遠くから聞こえるサークル勧誘の喧騒も僕の心をわくわくさせた。嘘だ、春の日差しの中なんかこうやって三人で歩いているのが、青春映画みたいでうれしかったのだ。

到着した購買も新入生上回生入り乱れてごった返し、無茶苦茶に混雑していた。おかげで売り物だって選ぶほど残ってない、だというのに僕はたっぷり迷って、ミスター優柔不断を發揮し、ようやく昼飯を決めてながーいレジを済ませてから購買の入口に目印のように立っているデカイ金髪のもとへ行った。あいつ便利だな。

人混みを掻き分けて近づくと、実は隣に、向井の胸の下くらいの高さに西条さんの頭も待ってて少し驚いた。二人の間には知人と他人の間くらいの微妙なスペースがあって、二それぞれ神経質そうに自分のケータイをいじってて、それが何だか笑えた。シャイなライオンちゃんと臆病なウサギさんみたいだった。その間に調子のいいおサルくんが入って、

「西条さん大丈夫だって、こいつ噛みつかないから」といって向井の前で手をヒラヒラさせると、「ウガッ」と言って危うく噛みつかれそうになった、くわばらくわばら。でも西条さんはちょっと笑ってくれた。

「君らさっき、シャイなライオンくんと臆病なうさぎさんみたいだったぞ」「…え？なんて？」「だから向井がライオンくんで、西条さんがうさぎさんで、僕が調子のいいおサルくんで…」「お前それ、すべってるんやから粘るなよ」「え？僕今すべったの？」「トーキチ、意外とハート強いよな」「…クスクス」みたいなのんびりした会話をしながら、さっきの教室へ戻ると、教壇で本を読んでいるはずの、メガネで帽子の津久本先輩の姿はなかった。

あれ？一瞬教室を間違えたかと思ったが、教壇の後ろの黒板にはさっきと同じように下手糞な字で「日文生履修相談会場」と書かれている、間違いはない。トイレでも行ったんちゃう？という向井の言葉に僕も西条さんもうなずいて、津久本先輩の行方は気にしないことにした。僕は「そっち行っていい？」と、西条さんの意向を確認してから、向井と机の上の荷物を西条さんの近くの席に移して、窓際で三人でご飯を食べ始めた、あったかい。

相変わらず西条さんはだいたい僕と向井の話の聞いてるだけだったが、ちょっと仲良くなってる気はする、相槌とかうってくれるし、笑ってくれるし。「津久本先輩おそいねー」「うんこちやう？」「飯食ってるときにうんことか言うな！」って言ったときは苦笑いしてたけど。僕は西条さんが笑ってくれてるかどうか気にしてばかりいた。

多分「向井食うのはえーな」って僕が言ってるくらいのときだったと思う。教室のドアがいきなりガチャリと開いた、いきなりだったので、三人とも思わず「え？なんで？」という顔をしてドアの方を見た。よく考えれば「何で？」もなにも、履修相談会場として開放してるんだから誰が入ってきてもおかしくない。でも、もうちょっとよく考えれば、この教室が僕たち三人のものだと錯覚するくらいには親密な空気になっていたということなんだと思う、僕だけ？

それはそうと僕たち三人以外の人物が入ってきたのだ、ガチャリ。

しかもそれはうんこから帰ってきた津久本先輩でもなかった。女のひとだった。細くて背の高い、僕ぐらいあるんじゃないか、髪は肩くらいで黒のタートルネックにスキニージーンズ、細い小さなネックレスというシンプルな恰好だったけど、セーターで体のラインが出てて、僕はちょっとグツときた。

女の人は、教室の中をぐるりと見て一瞬僕たちのあたりで視線は止まったが、すぐにその視線を教壇に移してつつかつかとそちらへ向かい、机の上に何かを見つけたらしい。一言「うわ、ハメラれた」とつぶやいて肩を落とした。いやいや、状況がよく飲み込めない、何が起こったんだろう。

はあー、と深いため息をひとつついて、教壇の椅子に腰かけて、女の人はあらためて僕たちのほうに向きなおった、ギロっと睨まれてる気がした。なんだか目つきが鋭い人だ、ちょっとこえーな。

「日文の新生の子たち、だよな？」

「…あ、はい」目つきの迫力に押されて三人とも一瞬息をのんだが、そこは向井が代表して答えた。

「時間割のほうはどう？できてる？」

「え、ええ、大体は」今度は僕が返事する、なんか怒られてる感じがするぞ。

「ならよかった。あたしが教えてあげなきゃいけないことはあんまりないね、津久本君にいろいろ聞いたんでしょ？」女の人はホッとしたような顔をして言った、その顔にちょっと僕たちもホッとした。西条さんがうなずいた。

「よし、んじゃあたし一応ここにいるけど気にせずくつろいでて、お昼ご飯の続き食べていーよ。時間割のこととか学校のこととかなんかあったら話しかけてくれりゃいいから」

そうって女の人は机の上に伏せてあった文庫を取り上げて読みだした、まるでさっきまでの続きを読むように。でもさっきまでその本を読んでいたのは津久本先輩だ、ていうか津久本先輩、どこまで読んだかわかんなくなっちゃうんじゃないかなあ。

「あの一」西条さんが教壇の女の人に控えめに声をかけた。「先輩も研究会の方ですか？」

「ん？あたし？」先輩は本から顔をあげて「あたしは違うよ。研究会とはなんの関係もないのに、津久本に呼ばれて何かと思ったら留守番を押しつけられた、そんなただの日文生」と言ったが、そこまで言って「あ、違うわ」と訂正した。

「ただの日文生じゃないわ、春から学生執行部のメンバーだ、オリエンテーションのときもいたんだよ？」

いたっけ？…ああ、いたかも、メガネかけてませんでした？

「そうそう、お前目がキツイから新生が泣く、とか言って伊達メガネかけさせられてたの、あたし目いいのに」

そう言って先輩はギロっと僕のほうを見た、多分ふざけてるんだと思うけど、確かにちょっとこわい。

そのギロつを次は向井に向けて、「オリエンテーションで君、見たよ」と言った。

さすがの向井も一瞬とまどった様子だった、おそるべしギロつ先輩。

「おっきいし、金髪だし、一番目立ってたよ、名前なんていうの？」

「向井です、向井恭介です」

「キョウスケ、…強そうだね」

「いや、多分その字ちゃいます」

「あ、そう？」

それから先輩は順番に僕と西条さんの名前を聞いてから、

「申し遅れたけど、あたしは峰岸康子です。執行部の新生担当だから何かとお世話するかも、よろしくね」と自己紹介した。こちらこそお世話になります。峰岸先輩はひとつ年上なだけなのにずいぶん大人に見えた。

「ところで津久本先輩はどこ行かはったんですか？」と、向井が思い出したように峰岸先輩に尋ねた。

峰岸先輩は、「あーあー、津久本？プロレス同好会の新歓イベント見に行ったみたいだよ」と飽きたように言って、教壇の上のメモを見せてくれた。

メモには、「総知大プロレス見てきます、新生の子たちよろぴく つくもと」と例の下手糞な字で書いてあった。おいおい、僕たち置き去りにして行っちゃったのかよ、ていうか曲がりなりにも相談会の責任者だろーに新生相手の学生プロレスのイベントを優先するってどうなんだよ

。

「あいつ自分の名前も書けねえのか」と峰岸先輩が忌々しそうに言った、こえー。

その時ドアから、コンコン、というノックの音がした、また誰か来たみたいだ。峰岸先輩が「どうぞー」と声をかけると、ドアがガチャリ、と開いた。

入ってきたのはちょっと派手な髪の色した、っていってもただの茶髪なんだけど、女の子が二人、たぶん僕たちと同じ新入生が履修相談に来たのだろう。峰岸先輩のほうを見ると、漫画だったら「あちゃー」という吹き出しが付きそうな顔をしていた。

でも津久本先輩に留守番を丸投げされている手前「あちゃー」で誤魔化すわけにもいかず「どうぞどうぞ、座って座って」と二人の女の子をうながした。それからあたふたと単位登録の資料や津久本先輩のプリントをかきあつめて、女の子たちの前に座り「時間割だよね？じゃあつくろっか」と時間割相談会を始めた。

その様子をチラチラみながら、僕たちは教室の窓際でお弁当を食べた。一番最後の西条さんが食べ終わったので教室の外へ弁当の空を捨ててから教室に戻ると、峰岸先輩の前に座っている女の子は五人に増えていた。あれ？さっきの二人に、さらに別の女の子三人が加わって峰岸先輩を囲んでいた。

そんな状況で峰岸先輩は「えっと、こん中から必修になってる演習科目が…四単位だっけ？」と単位登録の資料を見ながら慌てていた。「あれ？語学って一回生でいくついるんだっけ？」とか言っている。峰岸先輩の周りの女の子たちの頭にも「？」マークが浮かんでいた。僕たちはその様子を遠巻きに心配しながら、自分たちの時間割を見なおしていた。

ついに峰岸先輩は単位登録の資料を見ながら頭を抱えてしまって「あれ？」を連発している。女の子たちは自分たちでも同じように資料を広げてみるが、やっぱりよくわからない顔をしている。僕たち三人みたいに、彼女たちのグループもまだ会って間もないのだろうな、お互いに相談する様子も遠慮がちでなんだかぎこちない、あれじゃ解決はしなさそうだ。

そんな様子を心配しながら見てると、急に峰岸先輩がギロっとこっちを向いた。え？なんか悪いこと言ったっけ？とドキッとしたが、そうではなかったらしく、「君たち、津久本君に教えてもらって、だいたい時間割できてるって言ってたよね、とりあえずこの子たちに見せてあげて！」と助けを求めてきた、ギロっと。

僕たち三人は時間割表（仮）をそれぞれ持って、こっちこっち、と手招きする峰岸先輩たちの席へ行った。女の子たちも哀願するような目で僕たちを見ている、クク、いい目だ…、馬鹿か僕。それは多分、哀願するような目ではなく、向井にビビってたんだと思う、そりゃこわいよね。

時間割表を勝手に僕たちの手から取り上げて「ささ、これ見せてもらいながらやろう」と峰岸先輩は再度履修相談に取りかかったが、しばらくしてすぐ「これってどうやって作ったの？」と聞いてきた、もうギブアップかよ。

でも僕もそんな偉そうなことは言えなかった、なぜならどうやって時間割を組んだかよくわからないのだ。向井の方を見た、困った顔をしていた、お前もか。男二人が「うーん」という、考えてるふりしてるだけでその実なんとかやりすごせないかなあという魂胆がみえみえの顔をしてだんまりしていると、西条さんが「あの…」と言ってちょっと進み出た。

「まず必修は動かさないから、ここで決まりだと思うんです。それから英語と第二外国語も一回生は時間は選べないのでここに決まりで、教職を目指す人は…」と、他の女の子たちの時間割をすらすら組み立て始めた。

その様子に、新入生の女の子たちが感心するのはもちろん、峰岸先輩まで「ふん、ふん…あー、そういえばそうだったような気がするなあ」などと言っていた。向井も「そうそう、それやで」とか言っていたがこいつは多分嘘。

西条さんメイン、峰岸先輩サポート、みたいな感じで女の子たちの時間割を作っていると、また、ガチャリ、と教室のドアが開いた。今度は男子学生が一人。

峰岸先輩が「あたしもうコツわかったからあの子いくわ、西条さん引き続きこの子たちお願い」「はい、わかりました」と言い残して「こっちへどうぞー」と男子学生を席に誘導して、履修相談を始めた、今度はたどたどしい様子はない。

僕と向井は津久本先輩が置いていったお菓子を勝手に食べながら、教室の様子を眺めていた。西条さんを中心に女の子たちが「ここなんの授業いれるー?」「一般教養とか入れたらいいinchやう?」「西条さん、これでもええの?」「いいと思いますよ」とキャツキャと喋っている様子を眺めていた、いい光景だ。

「西条さん女の子相手なら割としゃべるんだな」

「ほんまやなあ、実は俺ら嫌われとったんかなあ」

「いや、お前が怖がられてたんだろ」

「人のせいにすんなや、お前もや」

「俺はちがうぞ、やさしいもん」

「アホめ」

そんな会話をしていたら、また教室に誰か入ってきた、女の子が三人。峰岸先輩もそれに気付いたが、まだとりかかったばかりで手は離せない。「ちょっとゴメン」というジェスチャーを西条さんに送った。

それを受け取った西条さんは「え?…えっと」と戸惑ったが、他の女の子たちが「うちら大分わかってきたから大丈夫やで、ありがどうな。あっちいったりーや」とうながした。「あ、え、はい?」とかなんとか言いながら西条さんはうろたえていたが、「じゃあ」と急に僕たち二人のほうを見ておいでおいでしながら「工藤くん、向井くん、この人たちにさっき津久本先輩が話してたような講義の内容とか教えてあげてください」と言った。

西条さんに名前呼ばれたよ、とちょっと感動したのは内緒だ。

それから新入生はどんどんやってきた。峰岸先輩と西条さんがフル回転状態だったのはもちろん、僕や向井も来た人たちにお菓子やジュースを配りながら、津久本先輩のしていた話そのままを受け売りにして話していた。向井はだいたい敬語で話しかけられていた。

それだけではない。はじめ西条さんに聞いていた五人組をはじめとして、あちこちで学生同士でも、自分たちでぺちやくちゃしゃべりながら時間割を作っていた。そのおかげでだいぶスムーズではあったけれども、それでも峰岸先輩と西条さんが大変だったのには変わりなく、西条さん

なんか特に、先輩を呼びづらい新入生たちにあちこちで呼ばれて「ああー…、はいー…」と目を回しながら席から席へとふらふら渡っていた。

たしか昼ご飯を食べたのが十一時半くらい、それからひっきりなしに日文生が出たり入ったり、ピーク時には立ったままのやつもいたくらいに混雑し、最後のひとりが「西条さんありがとー」と出ていった頃には三時近かった。つまり三時間以上ぶっ通しで、峰岸先輩と、自分もいち新入生に過ぎない西条さんは迷える子羊たちの行く先を、ちぎっては投げちぎっては投げしてさばいていたのだった。そんなに役に立ってない僕や向井ですら喋りつかれたのだから、峰岸先輩と西条さんの疲労や想像するに壮絶で、落ち着いた今、ふたりとも机に突っ伏していた。おつかれさまでした。

「みんな、ありがとねー」峰岸先輩が顔をあげた、いえいえ、と僕が返事する。西条さんは顔を上げる気力もないようで、そのまま「はいー…」と返事した。

峰岸先輩が、「でもほんと、三人がいて助かったよ、あたしひとりだったらどうなったことやら…」と言って、ペットボトルの水を一口飲み、「それもこれも…」と言いかけたところに、それもこれもの張本人がタイミングよく教室に入ってきた。

「いっやー、すごかったよー、天童貞人の新入生歓迎マイクパフォーマンス中に乱☆コータロー率いるドキドキセクハラ帝国軍が殴り込みにきてね…」

と、いう津久本先輩の上機嫌な声を聞くや否や、さっきまでぐったりしていた峰岸先輩はバツと立ち上がり、声の方向へ持っていたペットボトルを投げつけた。ペットボトルは教室中に水をまき散らしながら津久本先輩の鼻先に命中し、「あだっ」と間抜けな悲鳴をあげてその場にうずくまった。しばらくそうやって鼻をさすっていたが、ふと津久本先輩が顔を上げると、峰岸先輩の射殺すような見下した視線と目が合った。

うずくまったまま顔をあげた津久本先輩は、峰岸先輩の怒りの視線と目が合った瞬間、「えへ」と可愛く笑った、のと同時に峰岸先輩はその長い脚を振り上げ、彼のわき腹の位置へ超ロングフリーキックを蹴るような力強い一撃を見舞った。そのフォームの美しさに僕にはその光景がスローモーションに見えた。

哀れな帽子とメガネのサッカーボールは、蹴られた瞬間「がふっ」と肺中の空気が抜けたような音をたてて、そのまま教室の壁に叩きつけられ、もう一度床に転がされた。峰岸先輩はその空気の抜けた間抜けなサッカーボールを、何度も踏みつけながら、

「あんたが！勝手に！どっか！いっちゃんから！あたしが！どんなに！大変だったか！この屑！西条さん！たちにも！きちんと！あやまり！なさい！」と容赦ない追い打ちをかけた。津久本先輩は頭を抱えて丸まりながら何度も「ごめんなさいごめんなさい」と悲鳴を上げていた

初めは僕はただ呆気にとられて、その次にうわあ、阿鼻叫喚だなどと思って、だんだん津久本先輩の「ごめ…なさい…」が小さくなるにつれて、ていうか津久本死ぬんじゃね？と思い、慌てて止めに入ろうとした。そしたら、それよりも先に西条さんが「峰岸先輩もうだめえ！津久本先輩死んじやいますう！」と峰岸先輩の腰に必死にしがみついたが、まあそれで止まる様子もなく、ぶんぶんと西条さんを振りまわしながら「だいたい！あんたは！こないだも！…」と、まだまだ過去何カ月かの分は足蹴が続きそうだったので、その鬼の形相にちょっとビビったが、本格的にヤ

バいと思って僕も峰岸先輩の腕を後ろから掴んで「犯罪者になっちゃいますって！」と止めようとした、裏拳で殴られた、涙目。

その後、出遅れた向井と協力し、なんとか峰岸先輩をひきはがして椅子に座らせた頃には、津久本先輩の背中足跡だらけ、シャツはところどころ破れて、転がったペットボトルからこぼれた水で全身べたべたになっていた。そして息をしていなかった、あれ？ちょっと遅かったかな？

西条さんが津久本先輩に駆け寄って「先輩、大丈夫ですか！？息してください！」と声をかけながら背中をさすっていると、ようやく肩で息をしだした。ああよかった、生き返った。西条さんは新入生なのに履修相談もできるし、人命蘇生もできるのだ、えらいぞ。でも僕たちだってお菓子やジュースを配れるし、「どうどう」と自分たちが殴られないようにしながら峰岸先輩をなだめすかせることができるのだ、えらいでしょ？なだめながら気付いたけど、峰岸先輩ってば結構重そうなおブーツ履いてる、よく生きてたな。

西条さんは津久本先輩を介抱し、僕たちは峰岸先輩がとどめを刺さないよう見張っていると、ふーっと深呼吸をして、峰岸先輩が「水、ちょうだい」といった。しかし水はさっき津久本先輩めがけて投げつけてずぶ濡れにするのに使ってしまったので、僕は紙コップにお茶を注ごうとすると、「そのままちょうだい」と、まだ1・5リットルくらい残っているペットボトルに口をつけて、峰岸先輩は一息で飲み干してしまった、こえー。

水分補給をした峰岸先輩がもういちど大きな深呼吸をするのと、津久本先輩が正座のままむっくりと上半身を起こすのと同時だった。西条さんが「大丈夫…ですか？」と心配そうに声をかけたが、峰岸先輩は「そんなやつ心配しなくていいよ、っていうか西条さんも迷惑かけられてんだから一発くらい蹴っておきなさい」と冷たく言い放った。そうは言われても西条さんが津久本先輩を蹴ることができるはずもなく、つかむしろ僕が蹴ってほしく、でも怒ってる峰岸先輩の手前これ以上津久本先輩に声をかけてあげることはばかられオロオロしていた。

そんな様子を見かねたのか、津久本先輩が「いや、全面的に僕がわるかった、ごめんよ西条さん」と口を開いた。メガネをなおしながら僕と向井の方を向いて「そっちのふたりも悪かったね」と詫びた後、改めて峰岸先輩に向き直り、「峰岸さん本当に申し訳ございませんでした」と深々と土下座した。その様子を見下ろしつつ、峰岸先輩は教壇の上の「よろぴく」と書かれた例のメモをしゃくしゃくと丸めて、土下座する津久本先輩にぶつけ、ひとこと「誠意」、と言った。

外も暗くなり、予定していた履修相談会の時間がおわったので、教室を片づけてから、まっすぐ歩けない津久本先輩に僕と向井で肩を貸しつつ、学校の近くの中華料理屋に行った。五人で座敷のテーブルを囲み、峰岸先輩はさっそくメニューを広げながら「手加減しちゃ駄目だからね、たらふく食い貯めておきなさい」と言って、テーブルの反対側に座っていた津久本先輩に向けて、ニコッと笑った。そして「からあげと餃子と海老チリとチャーハンとラーメンと…」とぶつぶつ言っていた。僕の隣に座っている津久本先輩を見ると、泣きそうな顔をしながら財布の中のお札を数えていた。入学して三日目にして僕は大学生活で大切なことをひとつ学んだ、峰岸先輩は怒らしてはいけない。

結局僕たち後輩は遠慮気味に注文したが、峰岸先輩がアレもコレもソレもドレも注文するものだからテーブルいっぱいになってしまい、食えるのかコレ？と思ったが、結局みんなでペロリと平らげてしまった。意外と結構食べていた西条さんが「みんなでご飯食べるの楽しいですね」と上機嫌そうだった、たぶん津久本先輩以外みんな同じ気持ちだったと思う。

「ところで」向井が楊枝を使いながら津久本先輩に訪ねた。「よお新入生あんなに来ましたね、履修相談の案内やなんて入学式でもオリエンテーションでももらってへんかったのに」

確かにそうだ、僕と向井はたまたま行った新歓のサークルブースで色んな先輩をたどってもらいながら履修相談会場に辿り着いた。日文学科なんて学内じゃあマイナーな学科だからそんなにたくさんコネクションがあるとは思えない。なのにどうしてみんなあそこでやっているとわかったんだろう。ねえ、どうしてなんですか？

「ああ、ちょっと広告？告知記事みたいなのを出したんだよ」と津久本先輩は答えた。

「広告？そんなだせるんですねえ」向井が不思議そうな顔をしている。

「うん、学内のフリーペーパーみたいなものがあってね、そこに出したんだよ」

話の途中で峰岸先輩がふと立ち上がり「トイレ」と言い残して行ってしまった。その後ろ姿が洗面所に消えたのを確認して、津久本先輩は身を乗り出して向井に顔を近づけてこう言った。

「糞新聞、って聞いたことあるか？あそこに広告を書いたんだよ。まああの新聞は普通に何か書いても載らないし、ましてや広告記事なんて載りっこないから、ちょっと工夫したけどね。僕の場合糞新聞にコネも貸しあったから掲載してもらえたんだ」

くそしんぶん、聞いたことあるフレーズに今度は僕が身を乗り出して話に割り込んだ。

「糞新聞ってホントにあるんですね」

「あるもなにも学内であんなに影響力のある情報媒体はないぞ。うちの学校は新聞部とか広告サークルなんか活発で、それぞれの組織内にまた小さな団体があってどこもかしこもフリーペーパーみたいなのを作ってるから、学校内外あちこちに総和大的情報誌みたいなものがあるんだよ。でも糞新聞は完全にアングラを決め込んでどっかで配ったりはしないんだけどな、それなのに学校中に流通してんだよな、面白いことに。だから糞新聞なら…」とそこまで言いかけて「峰岸が戻ってきた、あいつ糞新聞嫌いだから広告記事載せたこと内緒な、殴られたくないし」と話を切り上げてしまった、ありや、もつと知りたかったのにな。

戻ってきた峰岸先輩が不穏な空気を察知し「なんの話してたの、あたしの悪口？」と聞くので

津久本先輩は「いや、僕のあのザマ見たら峰岸先輩には逆らわないほうがいいぞっていったんだよ」と誤魔化すと、「ふーん、それくらいならいいや」とさっぱりした様子で言った。

それ以降糞新聞の話題は一切でることがなく、でもどうしても気になる僕は隣に座っている津久本先輩にこっそり「先輩、糞新聞って…」と聞こうとしたが、その僕の言葉をサッと制して、津久本先輩は「君も痛い思いすることになるよ？」と小声で、でもマジなトーンで言うものだからそれ以上聞けなかった。ついさっき死にかけた人に言われると説得力あるよね。

みんなデザートの杏仁豆腐を食べ終わって、津久本先輩の分まで食べた峰岸先輩が「ほら三人とも、津久本先輩にごちそうさまは？」と言うので、ほんとにいいのかなと思いつつ「ご、ごちそうさま…？」と声をそろえると、津久本先輩が「おう！どうってことねえよ！」と涙声で言った。で、結局レジは津久本先輩と峰岸先輩ふたりで済ませていた。峰岸先輩って男前だよなあ、と向井に言ったつもりだったが、西条さんが「ほんとですよねえ」と相槌をうった。

店の前で待っていると二人が出てきたので、今度はちゃんと三人とも「ごちそうさまでした」といった。津久本先輩は今度はちゃんと「おう！どうってことねえよ！」といった。

「明日は今日作った時間割の登録があるからね、遅れずに学校来なさいよ」と親切に峰岸先輩が教えてくれた、僕はすっかり忘れていた。

それから峰岸先輩は、

「あと気をつけて帰りなよ、二人ともちゃんと西条さんを送って行ってあげるんだよ」と付け加えたが、向井が、「や、俺地下鉄でなんですわ」と言うと、

「じゃあ工藤くん、きちんと責任もって西条さんを送って行くように」と僕の方を見た。へへへ、峰岸先輩に言われちゃあ仕方ない、西条さんと二人で帰らなくっちゃあなあ、仕方ないなあ。

でもそれを聞いた津久本先輩が、

「逆に工藤と二人っきりで帰るほうが危ないんじゃないの」とニヤニヤしながら言うので僕は「な、なんてこと言うんですか」と訂正を求めたが、西条さんは「あ、でも私一人でも大丈夫ですよ、ほんと、ほんとに」なんて言っちゃってるし、傷つくなあ。

結局は峰岸先輩が「女の子一人で帰るなんて危ないよ、西条さん。大丈夫、工藤くんはそんなことする子じゃないから」と西条さんに言いつつ、でもその目はしっかり僕をギロリと射ぬいていたので、なぜか僕が「…はい、わかりました」と返事をしたがたぶんそれであってる。

「じゃああたしはこっちの男性に送って行ってもらおうかな」と峰岸先輩は一瞬チラと津久本先輩を見てから、後輩三人に別れを告げてスタスタ一人で歩きだし、津久本先輩が「峰岸のほうが絶対強いよ」と小さく言いながらそのあとを追った。ちゃんと聞こえいたたらしく向こうの方で津久本先輩はお尻をつねられているようだった、仲いいじゃんあの二人。「付き合ってるんちゃう？」と向井。どーかな？

「ほんなら俺電車乗るわ、また明日な」と駅へ消えていく向井を「じゃーなー」「おやすみなさい」と見送り、「西条さん家どっち？」「あっちです」ちょうど一緒の方向だった。

僕はその帰り道、西条さんのプロフィールを少しでも知ろうと全力を尽くした。形式的なものでいいからとにかく西条さんの情報を！一人っ子であること、中高と女子高であったこと、出身は金沢であること、高校ではバドミントン部だったこと、織田作之助という作家が好きだという

こと、本当は国立大学を目指してたということ、一人暮らしをするにあたって人生最大の親子喧嘩を繰り広げてきたということ（結局母が加勢して女二人に父親が折れたということ）。

あとこんなこともいっていた。

「私、中高と女子校だったんです」それはさっき言っていた。

「だから小学校卒業して以来、同い年くらいの男の子とは数えるくらいしか話したことがなくて、それなのに今日は峰岸先輩がくるまで男の子ばかりですごく緊張してたんです、…あ、その先で右です…何話していいかわかんなくて、ていうかちょっと怖くて」

「それはもちろん向井だよな」と僕が聞くと西条さんは誤魔化すように笑いながら、

「いえいえ、男の子が、です。でも二人とも、あ、津久本先輩もだから三人ともか、あの人男、っていう感じあまりしませんよね。工藤くんも向井くんもやさしくってよかったです、ホッとしました。なのにすみませんでした、私、つまらなかったでしょ？」

「いやいや、そんなことないよ、ていうかこっちこそ無神経でごめんね、緊張してたんだ？」

西条さんは照れたように「はい」といった、結構かわいいなおい。

「じゃあ今も緊張してる？」

「ううん、工藤くん、話しやすいからもう緊張しません。向井くんだったら怒ってるのかなって思ってちょっと緊張しちゃうかも」

「でもアイツいいヤツそうだよ」

「私もそんな気がします…あ、もうそのマンションなので、このへんでありがとうございます、送ってもらってごめんなさい…」

と、西条さんの指差した大きなマンションの隣の、小さな学生アパートが僕の下宿だった。マジ？

「え！ほんとですか？」と西条さんが驚いた。

「嫌？」とちょっと意地悪するつもりで僕が聞くと、「全然！そんなことないです！すっごくうれしいです」と本当にうれしそうな顔で今にもはしゃぎだしそうな顔で言うものだから逆に僕が照れてしまった。

「じゃあ何か困ったことあったらお世話になります、よろしくね」

「はい、こちらこそよろしくお願ひします。きっといっぱいお世話になると思います」大歓迎です！

じゃあね、おやすみ、と僕が自分のアパートに向かうのを西条さんが「すいません」と呼びとめた。「あの…ケータイのアドレス教えてもらっていいですか？」ああ！なんたる失態！本来なら男性である僕からアプローチすべきシーンじゃないか、こういうときは男の方からアドレスを聞くべきなのだ！高校の同級生が読んでたチョコキチョコキに書いてあったから間違いない！西条さんに勇気出させちゃって、僕も罪な男だね、まったく。

赤外線で「送るまーす」「おっけー」なんてやって、便利な時代だなあ、お、きたきた。「下の名前、実花っていうんだね」

「なんか植物みたいでしょう？工藤くんは何て言うんですか？」

「ぼく？トーキチ、工藤トーキチっていうの、カタカナでトーキチ」

そういうと西条さんは「うそだあ」と笑った、街灯よりも明るい笑顔だった。

「ほんとは吉信、でもトーキチって呼んでよ、向井があだ名つけてくれたんだ」

「わかりました、トーキチくんですね、じゃあケータイも工藤トーキチで登録しておきましょう」マジかよ、本名も忘れないでね。

「あと、それと」僕は付け加えた。「敬語もやめようよ、仲良くしてよ」

「あ、ごめんなさい…わかりました、敬語もなしにしましょう」といって西条さんは気付いた様子で、また照れたような顔になったので、「ちょっとずつ慣れていけばいいよ」と、僕は笑った。じゃあね、また明日。はい、おやすみなさい。

翌日寝坊し、時間よりすこし遅れて授業登録に行くと教室の入り口に峰岸先輩が受付係みたいにして立っていて、やべー怒られる？と思ったけど意外に優しい声で「工藤くんおはよー、こっちこっち」と僕を呼んでくれた、僕としては「昨日ちゃんと言ったでしょ！この愚図！童貞！」ぐらい言われるかと思ったのだけ。

もしかして昨日なんかいいことあった？とは口に出さず、「遅れてすいません」と中に入ろうとすると「昨日はちゃんと西条さん送ってあげた？」と聞かれたので「もちろんです」と力強く返事しておいた。峰岸先輩は「よしよし」みたいな顔をしていた、やっぱりなんか機嫌いいみたい。

こっそり教室に入るとすでに教授による授業登録の手続きの説明が始まっていた。こそこそしていたつもりだったけど、僕が入った瞬間教室中の視線が一斉に僕の方を向いたので、僕はもっと身を縮めて一番後ろの席に座ると、隣から小さな声で「トーキチくん、おはよ」と声をかけられた、西条さんだった。

西条さんは「私もちょっと遅刻しちゃって」と言ってテヘ、みたいな感じで笑うものだから、完全に油断していた僕は危うく恋に落ちそうになった、あぶないあぶない。まだ特定の彼女を作るのは早い、僕は遊びまくらなきゃいけないんだから本命なんか作ってるわけにはいかないのだ、西条さんごめんね。とは顔にも出さないで僕は「おはよう、完全に寝坊だよ」と言った。

津久本先輩でも峰岸先輩でもない先輩が前から記入書類を持ってきてくれたのでそれを受け取り、前の教授の話聞きつつ、西条さんに教えてもらいつつ書類を書いて提出、無事に授業登録を終えた。

それが済んで新生が落ち着いた頃に、教室の前に執行部の人十五人くらいズラッと並んだ。伊達メガネをかけた峰岸先輩もいた、メガネ姿もいいなあ。

四回生の部長さんが一歩前を出て「新生のみなさんご入学おめでとうございます」に始まり、執行部の活動紹介を経て、「それでは楽しい学生生活をお過ごしください」という一連のあいさつをした。

そのあとで「次に新生サポート担当の峰岸よりご挨拶があります」峰岸先輩の名前が呼ばれると、峰岸先輩は一歩前を出てマイクを受け取って、堂々とかつスラスラと僕たちの方を向いて話し始めた。

「新生のみなさん、ご入学おめでとうございます。執行部新生サポート担当、二回生の峰岸です。みなさんこれから始まる学生生活に胸を躍らせていることかと思いますが、その一方、楽しみと同じくらいに心配ごとや困りごとを抱えている人も大勢いるんじゃないかと思います。そんなときは我々執行部がみなさんの手助けをしますので、遠慮なく配布したプリントの連絡先まで連絡ください。特に私が接する機会も多いと思いますので顔を覚えていてくださいね。どんなことでもいいので、困ったことや相談事があればどんどん相談ください。学校で会ったら峰岸さん、とか気軽に声をかけてくださいね、どうぞよろしく」

と、話し終わって、教室中を例のギロツで見渡してから、違う違うと、あらためてニッコリ笑ってお辞儀した。お辞儀してから「それから…」と付け加えた。「日文研究会からもご挨拶があり

ます……津久本くん、こっち来なさい」峰岸先輩は教室の後ろの方を見ながらマイクを差し出した。

気付かなかったけど教室の隅には津久本先輩がいた。津久本先輩は「いやあ、まいったなあ」みたいなへらへらした笑みを浮かべつつ、チャリチャリと草履の音をさせながら前に出て峰岸先輩からマイクを受け取った。

「えー、ご紹介にあずかりました、日文研究会です、二回の津久本です。我々、つつつても僕の他には卒論のためにそんなことやってられない四回の先輩だけなので実質僕ひとりなんですけど、研究会は週に一度集まって本を読みながらああでもないこうでもない和不毛に話しあっております。えー、でも今年は僕一人なので活動もしようがないので、ぜひ新入生のみなさんに入ってくださいなと思ってます、というより誰か入ってくれないと執行部や教授の先生方に泣くまで怒鳴られてしまうので、どうか人助けだと思って入ってください、サークルやなんかと掛け持ちでもいいです。授業のように堅苦しくせず、お互い同じ目線で楽しく勉強しましょう、興味のある人は連絡ください。あと…」そこまで話して津久本先輩が峰岸先輩のほうをみると、峰岸先輩はプリントの束を掲げて目配せした。

「…これから配りますプリントで、新入生の皆さん同士の親睦会をご案内します。四年間仲良くする仲間同士フランクにやってください、僕と執行部の一部で企画するやつなので堅苦しいやつじゃないです。急で悪いんですけど明日の十八時からなんで参加される方は帰りに僕かあっちの峰岸にお伝えください。サークルの新歓やらなんやらで忙しいかと思いますが、おまちしてます、よろしく」

と、話して峰岸先輩と一緒にプリントを配っている間、教室のあちこちから「どうする？」「行く？」「明日は何もないから行こっかな」という新入生の声が聞こえてきた。

「西条さんどうする？」僕も隣の西条さんに聞いてみた。

「私ですか？」西条さんは前から回ってきたプリントを見つめ、うーんと考えてから「夕方からは何も予定がなかったので行こうかな、トーキチくんは行きますか？」と言った。

「僕？明日はサークルの新入生歓迎会は何もなかったはずだから行くよ…っていうか歓迎会の解禁って来週じゃなかったっけ」

「そうなんですか？」

「うん、どっかでそう聞いた気がする…まあ津久本先輩が何かズルしたんだろう」僕のその言葉に西条さんも「そんな気がします」と頷いた。事実、後で津久本先輩に聞くと「だって新入生歓迎会じゃなくて新入生同士の親睦会だもん、大体僕たちサークルじゃないしねー」と言っていた、確かに開催の理念はそうなのかもしれないけど詭弁だと思うよ。

僕は「じゃあ明日一緒に行こうか」と誘っておいてから、急に何か不安になり「近所のよしみで」と付け足した。西条さんは「はい、お願いします」と言ってくれた、ホッ。「じゃあまた明日連絡するよ」

プリントがいきわたったところで解散となり、教室の前にいる津久本先輩と峰岸先輩のところには人だかりができていた、結構みんな参加するんだな。僕と西条さんは先輩の周りが空いてから行くつもりで席にいたら、向井がこっちにやってきた。「トーキチたちは行くん？」

「行くに決まってんじゃない、ここで乗り遅れたら友達百人できねーぞ」

「友達百人はしらんけど学科内に知り合いおったほうがテストとかレポートとか助かりそうやしな。西条さんも行くん？」

「はい、トーキチくん連れて行ってもらいます」

それを聞いた向井はちょっとびっくりした顔をして僕と西条さんを交互に見ながら小声で「え？お前らもうそういうアレなん？」と聞いてきたので、僕はフフンと笑って否定はしなかった。

僕が否定をしなかったので西条さんが、「いえ、単にマンションが近くなので」とはっきり説明していた。「紛らわしい笑い方すんなや」と向井は僕を小突いて、「お前らが行くんなら俺も行くかな」と言いいながら前の人ばかりを見た。「俺ももっと友達つくらなあかんし」ボソツ。

その言葉を聞いてふと思いついた「じゃあさ、向井さ、親睦会の時間まで京都の街中案内してよ、ここの飯が美味しい、とかここで買い物するといい、みたいなの。向井、地元でしょ？」という僕の提案に、向井は「うーん」と言ったが「いいじゃん、どうせ暇なんだから」とダメ押しと「やかましいわ」と言いいながらも「いうても俺もそんな市内出るわけちゃうけどな、ええで」と了承してくれた。

そのやりとりを聞いた隣の西条さんが「え、じゃあトーキチくん私と一緒に行けないですね？」聞いた。

「え？もちろん京都案内は西条さんも一緒のつもりだったけど、もしかしてそれまで予定あった？」

「あ、いえ私も一人でちょっと買い物するつもりだったので、食器とか。でもお邪魔じゃないですか？」

「かめへんやろ、どうせトーキチとふらふら行くあてもなく歩くだけやし、西条さんも行こうや」

「うん、買い物あるんならなおさら向井に案内してもらおうよ、荷物も持ってくれるだろうし」

と、いう僕たちの言葉に西条さんは嬉しそうに「じゃあ明日は私もお願いします」と言った。やりい。

その晩は夜遅くまでエロサイトめぐりをしていただけのだから、昼ぐらいまで眠ってしまっていた。ケータイがやたらと鳴るので、なんだよ気持ちよく寝かせろよ、と思いつつ画面を開くと「着信中 西条実花」と表示されていたものだから、僕は慌ててベットから飛び起きて通話ボタンを押した。

「…お、おはよう」

「おはようございます、トーキチくん、もう準備できました？」

できているわけがない、上は高校の体操服で下はパンツ一枚、頭だってぼさぼさだ。僕はジーパンを履きながら、

「大変申し上げにくいのですが…いましがた西条さんの心地よい声で起こしていただいたところでして…」

「そうだったんですか、ごめんなさい起こしてしまって。でも向井くんに言われた時間に行こうと思ったらそろそろかと思ったんですが…」

「もちろん！全面的に西条さんが正しい！いまズボン履いたところだから五分…いや、八分ちょうど！八分後に西条さんのマンションのエントランスに行くから」

「はい、了解です。ゆっくり準備してくださいね」

「ごめんなさい！」

電話を切ってから、僕は体操服を脱いでシャツを選び、カーディガンを羽織った、ここまでで二分半。それから三分かけて歯を磨き、髪の毛を直すのに二分かかった、電話を切ってから計七分半、いいタイムだ。

ケータイを掴んで部屋を飛び出し、階段を下りる途中で財布をもってくると鍵をかけるのを忘れたことに気付き、また部屋に戻った、結局タイムは九分半、自分のアパートの出口まで行くと西条さんが待っていてくれた。

「おはようございます」

「ごめんね、遅くなっちゃって」僕は素直に謝った。

「そんなことないですよ、こちらこそ急かしてしまっただごめんなさい。でもすごいですね、男の子ってそんなに早く準備できるんですね。私なら起きてから三十分くらいかけないと外に出られないのに」と感心している様子だった。

近くの駅まで行って地下鉄に乗り、烏丸御池駅で降りた。一度外に出て、駅の地図を見ながら御池通りを西へ歩いた。

「でもどうして寝坊しちゃったんですか」

歩きながら西条さんが話しかけてきた。

「あ…いや、読書？本を読んでてさ」エロサイトパトロールをしながらオナニーしたせいで君との約束に寝坊しちゃったよ、言えるか馬鹿、馬鹿は僕だ。

「へえーいいですね、何を読んでたんですか？」

「あの一、アレだよ、アレ、東野…なんとか？」

「東野圭吾ですか？」

「そうそう、それ」

「私読んだことないです、今度貸してくださいね」

「いいよ、今度貸してあげるよ」僕も読んだことないけどね。まいった、今度本屋に行って買ってこよう、そんで急いで読まなきゃ。

これ以上西条さんに尋ねられるとボロが出るので、おもしろい本だとかについてこちらから一方的に話しを聞いた。西条さんの口から出るのは全然知らない作家やタイトルばかりで、ここに来て初めて「僕日文でやっていけるのだろうか」と不安になった。

それにしても天気がいい、歩いていて気持ちがいい。カーディガンの上に何か着たほうがいいかなと思ったけどいらなかった、すごくあったかくて、時どき風が吹くけど、涼しくて気持ちがいい。

隣を見ると西条さんもさっきまで羽織っていた薄いクリーム色のコート脱いじゃってた。小さな黄色い花の刺繍が入った白いブラウスに、こないだ着ていたブルーのカーディガン、下は紺のロングスカートから覗いている白くて細い足首の先が、茶色いかかとの低いパンプスに収まっている、足の甲に大きな白いレースの花が付いていて可愛らしかった。

僕はそんな西条さんを見て、うわ、肩細いなあ、女の子ってこんなに小さいんだ。ていうか今日は西条さん髪の毛お団子にしてるから首筋が見える、白い、そそるぜ！首筋に欲情するとは！恐るべし西条！みたいなアホなことを考えていた。アホなことを考えているうちに、京都市役所と金髪の大男が見えてきた。

僕としては「ごつめーん、待ったあ？」と可愛く言ったつもりだったけど向井にはそれが通じなかったのか「東西線ちゃうんや、っちゅーか遅いんじゃボケ」と怒った。その言葉に西条さんが、「ごめんなさい、遅刻しちゃって」と謝った。

「いや、西条さんは別にええねん。実際遅刻はトーキチのせいやろ？どうせ夜中によからぬことでもして夜更かししとったんちゃう」と言って僕の方を見てニヤアッと笑った、いきなり凶星かよ、凶星って英語でなんていうんだろ、何スター？

「でも、読書してたんですよ？」

「そんなん嘘や嘘、もしくは読書は読書でもエロ本かなんかやろ、な？」

ヘラヘラ笑う向井に西条さんの手前「ちげーよ」と言ったものの、実際凶星だし笑い顔がキュートだし、よし、許した、もともと僕が悪いんだし。

とりあえずちよっと遅めの昼飯に市役所の近くにあるパスタ屋でスパゲッティを食べてから、河原町通りを四条通まで南下しながら店を覗いた。基本的に立ち止まるのは西条さんが「あっ…」みたいな表情をしたのを敏感にキャッチした時だけで、後は歩いている人を見たり、ここ何日かの新生活について話したりしながら歩いた。

四条通に着いたら右に折れて通りを東へ、ジュンク堂まで歩いて少し本を覗いてから、また北へ曲がり錦通りで立ち止まる。錦市場を「うまそう」「鰹節がいい匂いです」とかなんとか言いながらまた東へ歩いて新京極通りまで突き当たり、そこからまた北へ向かいながら通り沿いの土産物屋で「懐かしー、コレ買ったことあるー」とか、帽子屋を覗いて「これとかカッコええんちゃう？似合う？」「津久本先輩みたいですよ」とか言いながら歩いていると少し疲れたので、向

井が「死ぬほど美味しい」と力説するチーズケーキ屋に入って一休みした。こいつ、チーズケーキとか食うのか、バナナとかのほうが似合うのに。

「はあー、結構歩いたねえ」水を一口のんで僕は思わずため息をついた。

「京都で若い人が買いもんしようと思ったら大体いま歩いた辺りがええやろうな」

「これからちょっとずつあちこち覗いて詳しくならなきゃですね」西条さんはジュンク堂で買った、京都の地図が載っているガイドマップを見ている。

「まあ四年もあるんやしな、生活しとったら嫌でも詳しくなるわ」

「四年しかないけどな」そう言って僕は二人を見た。

チーズケーキは少し割高だったけど、確かにおいしかった。西条さんなんか「お店も可愛いし、毎日通いたいです」と興奮していた。向井から、学校の近くに本店がある、と聞いた西条さんが是非行ってみたいというので、また三人でチーズケーキを食べに行くことを約束した。西条さんがもうひとつ注文しようとしたのを、もう待ち合わせの時間だからと店から連れ出して、向井について行きながら阪急百貨店前へ向かった。

夕方の四条河原町は地元のお祭りでもこんなにいなくてというくらいの人ごみで、大半が暇そうな、アホな恰好した大学生だった、って僕もか。向井からはぐれないように交差点をワーツと渡って、集合場所になっている世界地図の形をした看板の前まで行くとチラホラ見たことのある顔の集団があったので、多分この辺で待っていたらいいのだろう。

三人で話しながら待っていると「今日は遅刻しなかったね」と峰岸先輩がこっちへやってきた。「この辺みんなうちの日文ですか？」と僕が尋ねると、峰岸先輩は「どうだろ？」と言って笑った。「私も完全に顔と名前が一致するの君くらいだもんね」なんかうれしいぞ。

向井がキョロキョロと見渡して「津久本先輩は来たはらへんのですか？」と聞くと、峰岸先輩の眉間にしわが寄った。いらんこと言うな、向井。

「あそこ」と指差した方には、うちの学生らしき若者の間をふらふらと歩いて話しかけている津久本先輩の姿があった。足を引きずってるように見えるんですけど。

「また寝坊したから一発蹴ってやった」一発でアレかよ。

峰岸先輩の刺すような視線に気付いたのか、津久本先輩が「ようこそようこそ」と言いながらこっちへやってきた。

「ここまでまっすぐ来れた？」

「はい、向井くんが連れてきてくれたんです、さっきまで三人で向井くん案内してもらいながら街歩きしてたんです」

「そりゃよかった、そーかそーか、向井は京都の人だったもんね、金髪なのに」

そう言われた向井は「だから金髪関係ないでしょう」と苦笑いした。

「三人ともさっそく仲良しだねえ、いいことだ、大切にしなよ？でも今日は三人で固まっちゃわずに他のみんなとも仲良くするんだよ」と津久本先輩が話していると、向こうから女の子が何人か西条さんめがけてやってきて「あーみかちゃんだー」「今日の恰好もかわいー」「いつ来たのー」とあつというまに連れ去って行ってしまった。「…西条さんは問題ないね、君らは友達増やしていきなよ」いや、憐れむような目で見ないでください。

津久本先輩は時計に目をやってから「そんじゃあ時間だから、総和大日文生はそろそろ行くよー、この帽子のお兄さんかこっちのデカイ金髪を目印についてきてねー」と大声で言った、関係ない人もいっぱいいたろーに、正直恥ずかしかかったが、目印にされた向井はもっと恥ずかしかかったと思う。

津久本先輩と向井、一緒にいる僕を先頭にぞろぞろと交差点を渡り、河原町通りを北へ向かった。はぐれたりしないのかな、と後ろを見ると一番後ろに峰岸先輩がいた、そりゃそうか。

河原町通を途中で東へ入り、木屋町通りに出るとなんだかお酒の匂いがした気がした。そのまま少し歩いて目的の「海神丸」という居酒屋に着いた。津久本先輩について明るく照らされた地下への階段を下りると、喧騒と魚の匂いがワツと出迎えた。出てきた店員さんは津久本先輩が何か言う前にその姿を見ると「まいどっ」と奥の座敷へ案内してくれた。

靴を脱いで座敷に上がり、津久本先輩が入り口近くに座ったので僕と向井もなんとなくその近

くに座った。他の参加者も後からどんどん入ってきて、五十人くらい入れそうな座敷はあつと言う間にいっぱいになった。最後の峰岸先輩が入ってきて、適当に空いているところへ座ると、津久本先輩がよっこらしよと立ちあがった。

「みなさん今日はお集まりくださいますありがとうございます。特に何も言うことはありませんので楽しくやっていたら結構なのですが、一点だけご注意申し上げます。飲みすぎたり、飲ませすぎたりした人は、峰岸先輩に、半殺しにされます、これは脅しではなく警告です、以上！」絶対にマジだ。

その後テーブルごとに飲み物のオーダーをとった。さっきの警告にビビった感じの飲み物と、刺身やら唐揚げやらの定番の料理が運ばれた。最後に峰岸先輩の前に二合徳利とお猪口が置かれると、もう一度津久本先輩が立ちあがった。

「みなさんお手元に飲み物はございますか…よござんすね？それでは乾杯といきたいのですが、部外者の上回生が乾杯の音頭をとるのもアホらしいので、ここは新入生の方どなたかに、簡単なあいさつと乾杯の音頭をお任せしたいと思います。…立候補！」と津久本先輩が手を挙げてみせたが、ほとんど知らない者同士、誰もそんな勇気は持ち合わせていないようだった。

そこで津久本先輩は、「…では立候補がないのでこちらから指名させていただきます。…そのデカイ金髪！向井くん！」とすぐ近くに座っていた向井を指差した。向井はおどろいた顔をしていた、しめしめ、目立つからそうなるんだよ。

しかし津久本先輩はその指先をゆっくり隣に座る僕にずらして「…のとなりの工藤くんにお願いします、工藤くん起立！」と指名した、え？僕？戸惑っているとパチパチと拍手が聞こえてきて、そのほうを見る峰岸先輩がニヤニヤしながら拍手をしていた。つられてパラパラと拍手が大きくなってきたので、ええい、ままと立ち上がり挨拶をした、こうなったらキメたる。

「ご指名にあずかりました、工藤トーキチです。本名はトーキチではないのですが、こちらの金パの向井くんがつけてくれたあだ名なので皆さん是非トーキチと呼んでください。僕は地元を離れ、たった一人、一切の知り合いのいない、この古都京都へ単身やってきました。死ぬほど心細いです、うさぎだったら死んでます。ですが今夜はまだ死なないで済みそうです。なぜなら今日この日に今から乾杯した皆さん全てが、乾杯した瞬間から友達だからです、一気に友達五十人です。これからの四年間を、ともに笑って泣いて、薔薇色のブラボーな四年間にしましょう。それでは今日のこの夜から始まる、僕たちの永い友情に……乾杯！」…キマった。

続いて、乾杯！とあちこちでジョッキの重なる音がした、ドキドキしたけど気持ちよかった、初めてセックスする時もこんな感じかな。座ると向井が「乾杯」と生中の入ったジョッキを向けてきた。乾杯。

「かっこええやん」

「まーな」

視線を感じてそっちに目をやると、ちょっと向こうのテーブルの端に座っている西条さんがニコニコしながら何かのジョッキをちよつと上げているのと目が合った。僕も照れたように笑って梅サワーのジョッキを上げた、乾杯。一口飲むと、慣れないお酒でふわふわした、楽しい。

この後あっちこっちのサークルの新歓に参加するのだけれど、どこでも大体話している内容は同じだ。まずは「出身どこ？」僕だったら、「名古屋の近く、そうそう味噌カツ、学校の蛇口ひねると赤だしが出るよ」、みたいなことをしょっちゅう言っていた。相手にも「北海道？冬はグラウンドがスケートリンクになるんでしょう？」とか「香川っていったらアレじゃん、三食うどんなんでしょ？長野県民と喧嘩すんなよ？」とか言っておけばなんとなく仲良くなれる。

あとは「サークルどこ入る？」とか「〇〇学部だったら××知ってる？」とかだ。サークルによっては「どんな音楽が好き？」とか「高校はサッカーやってたの？」とかもよく喋ってたと思う。

この日の日文生親睦会でも、テーブルの向こう側に座った女の子たち相手にそんなようなことを喋ってた。

「…地元が熊本ってことはいま一人暮らし？お国の彼氏さんが泣いてるんじゃない？」

「えー、平気だよ、彼氏とかおらんしー」よし、この子はフリーか。

「そうなの？じゃあこっちで探さなきゃねー」

みたいな薄っぺらいアホな会話ばかりしてたけど僕はそれなりに楽しんでた。なんか自分がイケてる大学生みたいな感じがしたからだ。もっとも女の子たちは向井のほうをチラチラ見て気になるみたいだったけど。なんだよ夢見させてくれよ。

じゃあその向井は女の子としゃべらずに何してたかっていうと、津久本先輩にまた研究会の話を聞いたり、文学？本の話しっぼいことをしていた。僕はこいつはヤンキーでもなんでもない、ただのモテる金髪だと確信した。

いままであんまり飲んだことなかったけど、思ったよりお酒がおいしく飲めて、おかげでお腹がたぷたぷになってしまい「おしっこしてくるわ」「やあだあ〜」みたいなことを言われながらトイレに行った。

トイレから戻ってきて元の場所、向井の隣に座ると、向井が「おい、ちょっと」と話しかけてきた。「おい、アレ」

向井の目線の先には西条さんがいて、西条さんをアレ呼ばわりとは何事だと思ったけど、向井の「おい」に込められた思惑は西条さんじゃなくて、いや、西条さんは西条さんだけど、向井が言いたかったのは西条さんが酔っぱらった男に絡まれてるってことだった。

「俺の見間違いやなかったら、アレ、西条さん困ってるよなあ」

「うん、口元は笑ってるけど、目は僕たちがうんこの話してる時の目だね」

「やったらめっちゃめっちゃ嫌がってるやん」

「そう思う」

僕はしばらく西条さんに絡んでいる男を見つめてあっち行けビームを出していたが全然効果はなかった。僕がビームを出している間黙っていた向井が、

「ちょっと今からかっこええことするし、よお見とけよ」と言ってビールをグイッと一口飲み、ジョッキ片手に立ち上がった。すでにかっこいい。

そのまま彼は西条さんのテーブルに行き、西条さんと迷惑男の間に後ろから顔を出して「おお

、西条さんやん、飲んでるか？」と男の方を無視して、西条さんに大きな声で話しかけた。突然の向井の登場に少し驚いたようだったが、でも西条さんはすこしホッとした顔になり「いえ、あんまり飲めないの…」みたいなことを言っていた。

すると、またデカイ声で「あかんやんけ西条さん、せっかくやし飲め飲め、ホラ俺が付き合ったるやん」と腰をおろしかけながら、向井は男に向かって「あ、ここ座ってもええよな？」と大きな声で言った、あーいう傍若無人なヤンキーっているよなと思った。向井は無神経で自己中なヤンキーのふりをしていた。

でも、ふりだろうと何だろうと世の中は無神経で自己中なヤツが強くて、その時もそれまで西条さんに絡んでいた男が「じゃあ僕トイレ行くしええよ」とかなんとか言ってどっか行ってしまった、金髪関西弁ヤンキーの完全勝利である、当たり前か、だれもそんな怖そうな奴と女の子を取り合いたくない。

津久本先輩もその様子を見ていたらしく「あいつ無茶苦茶じゃねーか」と楽しそうに笑っていた。丁度僕の手元に三杯目のレモンチューハイが来たので、店員さんからそれをもらいがてら津久本先輩に寄って行った。

「でもあのヤンキー、やたら津久本先輩をしたってるみたいですね」

「え？そーお？」

「だって女の子としゃべらずに先輩とばっか喋ってたじゃないですか」

「なにそれ、あいつホモなの？」

「…かもしれないですよ、どうします先輩？」

「じゃあ研究会に入れてあげられないなあ」と言って津久本先輩は笑った。

「え？あいつ研究会入るんですか？」僕は驚いた。

「うん、入りたいみたいなこと言ってたよ、何にもしてあげられないからやめときなって言ったんだけど」

「いやいや、また峰岸先輩に半殺しにされますよ」と僕が言うと津久本先輩は「あ、そっか、じゃあ意地でも入ってもらわなきゃな」と深刻な顔になり何かのロックを一口飲んだ。

その後さっきの女の子たちも交えて津久本先輩に大学生活について色々教えてもらっていたら向こうの方のテーブルで大きな声がした。

「さーいじょーちゃん、どおーお？たのしいー？」

見ると徳利とお猪口を持った峰岸先輩が西条さんと向井のいるテーブルへふらふら近寄っていた。さっきまで峰岸先輩が羽織っていた黒いブラウスはどっかに脱ぎ捨ててきたらしく、上はワインレッドのキャミソール一枚、つるりとした肩もすらっと長い腕も全開にし、その素晴らしいスタイルを惜しげもなく晒していた。なんつう恰好だ、もっとやれ。それにしても、もしかしてだいぶ酔っぱらってる？そして二人の間に無理やり「いっしょにのもーよー」と割り込んだ。

「ちよ、峰岸先輩、そんな無理やり割り込んだらジョツキひっくり返しますやん」と向井は身をよじったが、峰岸先輩は

「だったらあんたが片づけてどいたらいいじゃないの、むかいくん」

と、さっき向井がしていたように、強引にその向井を追い払った。邪魔者のいなくなったところ

で改めて西条さんのほうを向いて、座布団の上に正座した。

ようやく向井に助けられて落ち着いたところに、また新たな酔っぱらいに絡まれ戸惑っている西条さんを、新たな酔っぱらい、峰岸先輩は真剣な顔でまっすぐ見つめていた。西条さんはどうしていいかわからず、助けを求めるように僕たち方を見たり、峰岸先輩のほうにおどおどした視線を戻したりしている。すると西条さんを真剣な眼差しで見つめていた峰岸先輩の表情が一瞬、ニタァーとだらしなくゆがんだかと思うと、

「さいじょうちゃん、かわいー！」といきなり西条さんを抱きよせたのであった。

突然のことに何がなんだかかわからない西条さんは、酔っぱらって「かわいー、かわいー」を連発する峰岸先輩にされるがまま、何度も胸の中で強く抱きしめられて訳のわからない様子だった。

次第に峰岸先輩は西条さんを抱きしめるには飽き足らず、ほっぺたをふにふにと触ったり、「すべすべー」と西条さんの白い腕を撫でまわしたり、挙句の果てには「ちゅー」と言って首筋に口付けまでしたのである、それも何度も。全身を好きなようにされるうちに、ようやく我に返った西条さんは「だめですってば、峰岸先輩！恥ずかしいです！」とジタバタして酔っぱらいからの脱出を試みたが、圧倒的なパワーの差に無駄な抵抗にしかならなかった。むしろもがけばもがくほど「さいじょうちゃんかわいー」と峰岸先輩にあちこち撫でくりまわされる羽目になった。

西条さんてば一難去ってまた一難ね、なんて悠長なことを考えながらその光景を眺めていたが、西条さんからS O Sの視線がとんできたので、ニヤニヤ見ているわけにもいかず、僕はその場で膝立ちになって、

「峰岸先輩、その辺にしてあげてください」と声をかけた。立ち上がって止めに入らなかったのは、スタイルのいい峰岸先輩に小柄な西条さんが体中をまさぐられながら、ときどき「やあん」とか色っぽい声が漏れるのを見て、不覚にもマイサンが先に半立ちになってしまっていたからである、無論不可抗力である。

僕の声に気付いたらしい峰岸先輩は西条さんを抱きしめる手を緩めてこっちを見た、ギロリ。手の緩んだ隙に西条さんは峰岸先輩の胸の中からの脱出を試みたが、敢え無く手首をつかまれてしまい、完全な脱出は失敗に終わった。峰岸先輩は西条さんを逃がさないように手首をつかんだままこっちを向いて笑った、さっきみたいにニタァーつとではなく、なんていうか、目はギロリのまま、口元にゆっくりと薄い笑みを浮かべて。そしてこっちのテーブルまで聞こえるように言った。

「どうくんも、こっちきたら、キューツとしてあげるよお？」

笑みを浮かべた峰岸先輩は、酔っぱらっているせいか目が少しうるんでいていつもはちょっと冷たい頬も赤みがさしていた。おまけにキャミソールの肩ひもが片方ずれていてブラジャーの紐が覗き、舌を覗かせて唇の端をペロツと舐めた。要するに鼻血が出るくらいに色っぽかったのである。

もちろんマイサンもフルスロットル全開オツケー！ゴー！ショック！になり、僕はマイサンもろともトップギアで峰岸先輩の胸に飛び込むため立ち上がろうとしたが、津久本先輩に腕を掴まれて「酔っぱらった峰岸に抱きしめられてみろ、手加減できないうえにあいつ男には容赦ないから体中がきしむぞ、下手したらアバラが何本かいくぞ」と止められた。その言葉に僕はくしゃ

くしゃになった僕の姿と激痛を想像し、マイサンと一緒にしおらしく座った。

「なによー、あたしがぎゅーってしてあげるのよー」と峰岸先輩は文句を言っている。でも僕が立ち上がる気配がないのを見ると「もー」と言って津久本先輩のほうを見た。

「じゃー、かずくんこっちおいでー、あたしがなでなでしてあげるー」…かずくん？誰だ？

津久本先輩は峰岸先輩に聞こえるような声で、「ぼーか！お前酔っぱらってんだからもう寝てろ」と言うと、峰岸先輩は「ぶー」と頬を膨らませて津久本先輩をにらんだ、でもいつものギロリみたいな迫力はなかった。

それから「いいもーん、さいじょうちゃんがいるもーん」といって西条さんの太ももに頭をのせてしばらくじっとしていたかと思うと、そのままぐうぐう寝てしまった、なにがなんやら。

「あいつ酔っぱらうと男女構わず抱きつく癖があるんだよ。んで、酔いがある程度までいくとああやって寝ちゃうんだよ」と困ったように津久本先輩が説明してくれた。

「なんすかソレ、大サービスじゃないですか」

「手加減さえしてくれりゃあね」

津久本先輩はため息をついて時計を見てから、「ぼちぼちお開きにしますか」と立ち上がった。

「はい、それでは宴もたけなわかと思いますが、そろそろお時間ですので行ったんここらでお開きにしまーす。今日はたくさんご参加いただいてありがとうございました。好評のようでしたらまた企画しまーす。あと、執行部と研究会も入部募集中なのでよろしくねー。それでは僕と峰岸は帰りますので、二次会やりたーい、という人はこの工藤くんについていってくださいねー」またこの人はそういう適当なことを言う…、と思いながら「はいはいそれじゃあ解散、解散。みんな店から出た出た」と津久本先輩に追われて店を後にした。店を出ると辺りはすっかり暗く、夜の木屋町通はなんだか大人の空気だった、溢れかえってるのは大学生ばかりなんだろうけど。

「ほんじゃあ僕たちは帰るから、工藤と向井、あとよろしくね」

と、津久本先輩は酔いつぶれた峰岸先輩をおんぶしてどこかへ消えていった。「やっぱあの二人仲ええやん」たしかに、やっぱ付き合ってるのかなあ。

後ろから「トーキチくーん、ほんでどーするーん」と女の子に呼ばれたので、僕は津久本先輩に置き去りにされた新入生の集団に向き直った。

「えーっと、先輩にお願いされたので二次会は僕と、この向井が仕切ろうと思いますが…二次会みなさんいきますかー？」

と、聞くと「行くー」「はい」という声や「今日はもう帰ろっかな」「オカンうるさいし、また…」という声でザワザワしだしたものの、するだけで動き出す気配がないので向井が、

「じゃあ二次会行く人はこっち、行かへん人はこっちにおってくれ」

と集団を二つに分けた、二次会に行く人は二十人前後くらいだった。

「ほんなら帰る人らは気をつけて帰ってな」と向井は帰るチームに手を振ってから僕にどこ行こか、と聞いた。

「僕に聞かれても何日か前に京都出てきたばっかだよ？」

「いや、店の名前を言えとはいうとらへんよ、別の居酒屋行くかそれともボウリングとかカラオケとか…」

と、そこまで言いかけたところで、二次会チームの女の子の集団から「カラオケ行きたーい」と声が上がったので二次会はカラオケに決まった、確かに居酒屋に比べたら大勢入れるしね。

ほんならついてきてなー、と向井を先頭に集団はぞろぞろ歩きだした。一応僕は一番後ろからついていったけど、誰かはぐれてしまう心配もなく、木屋町からまた河原町通りに出たすぐにカラオケ屋はあった。それと後ろから見てたらいつの間にか向井の隣に西条さんが歩いていた、さっき助けてくれてありがとうございます、とかなんとか言ってるんだろうかね？

受付で人数を告げるとテキパキ部屋を手配してくれて、でもさすがにいっぺんに入るのは無理があったので二部屋に分かれることにした。後ろからついて行った僕は向井、西条さんとは別の部屋になったけど、まあこっちの部屋でせいぜい友達増やすぜ、バーイ。

地元が結構な田舎で、ボウリングも映画館もビリヤードもなく、若者の娯楽施設といえばカラオケだけだったので、僕は友達としよっちゅうカラオケに行っていた。ので、多少は慣れていたけど、よく考えたら女友達なんてほとんどいなかったものだから、こういうときどんな曲を入れたらいいかわからない。とりあえずみんなの飲み物を頼んで、僕だけじゃなく他の人ももマイクを握らずにだらだらと喋っていた、そりゃそうか、だって僕たちほぼ初対面だし。

飲み物が来て、とりあえずかんぱーい、ってやって、でもまだ僕たちはダラダラと話していた。峰岸先輩エロかったよなー、とかみんなでそんなこと話していると、隣に座っていたおっぱいと鼻が大きな女の子に「はい」とマイクを渡された。

「じゃあトーキチくんからお願いします」なんでだよ。

「せやな、トーキチくん乾杯のあいさつとかしとったもんな」と男が煽ると別の女の子たちも「そうそう、あれ先輩にいきなり振られたんやろ？すごいよな、あたしなら無理やもん」「わたし

も思った一」と褒められたら、えへへ、悪い気はせず、そういわれちゃあしょうがないなあ、とおどけて見せ、ウーロンハイをぐっと飲んだ、僕はカラオケに着いても調子に乗ってまだお酒を飲んでたのだ。

「じゃあねー…」と、おっぱいの大きな女の子にリクエストされて、その時テレビやラジオでかかりまくっていたケツメイシの曲を歌った。卒業式シーズンに色んな友達が何度も歌っていたので僕も覚えていた。いい曲だと思う、つい一カ月ほど前、僕はこの歌のPVを見ながら、僕も大学生になったら桜舞い散る中でこんな彼女を作るんだと思っていた。その大学生は今だった。

ちょっと怪しいところもあったけど、酔っぱらったせいにして歌いきった、サビなんかみんなで歌っちゃったりしてね、イエーイ。それでなんとなく打ち解けたらしく、僕の次にすぐ「さくらんぼ」が入っていて、「次わたし行きます！」と隣の女の子が立ち上がりおっぱいを揺らしながら歌っていた、うおおお！もう一回！

それから揺れるおっぱいを鑑賞しつつ、調子に乗ってお酒を飲み続けてたので、またトイレに行きたくなり、マイサンからなんちゃらハイの混合液を絞り切ってスッキリした帰り、もう片方のチームは何してんだろう？と部屋を覗くと向井がモテていた、いや、ほんとに。

向井は両脇をちょっと派手めな恰好をした女の子何人かに挟まれて、カラオケの大音量でよくわからなかったけど何か話していて、おまけに彼の前にはたくさんの空のジョッキがあった、お前も飲んでんのか。

西条さんとはいうと、こちらはこちらで毛色の違う女の子たちにモテていて、ニコニコしながら何か飲んでいて、君もか。二人が割と飲んでるようだったので、僕はしっかりしたほうがいいかな、と思ってお酒は今飲んでる分をやめとこっと。

まあ邪魔する必要もないよな、っていうか僕は僕でさっきの隣に座っていた女の子と仲良くしなくっちゃいけないので、その部屋を後にして元の部屋に戻った。さっきの女の子の隣には別の女の子が詰めていた。僕は空いていた入り口近くの男の隣の席についた…。

それから楽しい時間を過ごして、そのうちに「プルルルル…」と例の受話器が鳴って、やっぱり「お時間です」と言うので、最後に一曲、なぜかみんなで「世界にひとつだけの花」を合唱して部屋を出た、僕あんまりこの歌好きじゃないけどね。

部屋を出ようとする、隣の向井たちのところから女の子が顔を出して、「トーキチくん、ちょっと」と呼ぶので、おいおいモテモテだな僕、と、おっぱいと鼻の大きな女の子に会計票を渡して先に行ってもらい、部屋を覗くと、困った顔をした女の子たちと、べったりソファに寝転がった女の子がひとり、西条さんだ。

「あんな、西条さん結構酔っぱらったみたいで寝てしまっただと一人が状況を説明してくれた。「トーキチくんとマンション近いっていうたし…」オーケー、お姫様は僕がお送りしますよ、喜んで。

とりあえずゆすぶってみたけど、可愛い顔をしつつ「うーん」と言うだけで起き上がる気配がないので、女の子たちに手伝ってもらいながら部屋から連れ出した。

みんなで西条さんを抱えながらフロントに連れ出していると、トイレの方から派手目な女の子たちが、さっき向井を囲んでいた女の子たちが「トーキチくーん、ちょお来てやー」と僕を呼ん

でいた、嫌な予感がした。

西条さんを女の子たちに託して、そっちに行くと「向井くんトイレから出てけーへんねんか」と男子トイレを指差した「うちらが様子見に行くわけも行かんし、トーキチくん助けたってくれへん？」…へいへい、喜んでゴリラを連れ出しますよ。

中に入ると開きっぱなしの個室の中で、向井が便器を抱えてぐったりしていた・

「向井、むかいー、生きてる？」

「…ううう」一応返事はあった。どうやら何度か吐いてる様子だったけど、幸い口元が少し汚れてる程度だった。トイレの外の女の子に水とおしぼりを持ってくるよう頼むと一人が「水ならうち持ってるよ」とボルビックをくれた、僕はそれを持ってトイレに戻り、ぐったりする向井を無理やり起こして水を飲ませ、持ってきてもらったおしぼりで顔を拭いてやった。

僕に介抱されながら向井は、「ホンマ、すまんあ…トーキチ、ごめんしてなあ…」と何故か涙声だった、え、もしかして泣き上戸？

ようやく立ち上がれるようになった向井を抱き起して、肩を貸して歩きながら、めんどくさいから泣くなよ。という僕の声にまたしても向井は目のあたりを押さえて、とーきちごうえんなあ～、と情けない涙声で言った、何言ってるかわかんねーよ。

巨体を抱えながらようやくフロントにたどり着くと、他のみんながもう清算を済ませてくれたので、僕は自分の分と向井、西条さんの分を立て替えた。西条さんはソファで相変わらず寝息を立てていた、天使か。

酔いつぶれているのは何も西条さんと向井だけではなく、まあみんな各々の分担みたいにして酔っぱらいを抱え「またなー」「気をつけてねー」と介抱しつつ帰って行った。

僕も店を出て、適当にタクシーを捕まえて酔っぱらいを詰め込み、運転手に行き先を告げた。運ちゃんに「大変ですね」と言われた。いえいえ、運賃はあとで彼らに請求しますから、手間賃上乗せして。

タクシーの中で西条さんに何度も声をかけたが、すやすやと深い眠りの底にいた。肩を掴んでゆすっても全く起きる気配がない。おい、もしかしてアレか、眠るお姫様を起こすには王子様のキスか、と酔っぱらった勢いで恐る恐る顔を近づけたところでタクシーが停車、僕は西条さんに思いっきり頭突きをかましてしまった。それでも西条さんは起きない、っていうか目から火花が散るくらいに痛かった、西条さんは石頭だったのか、自分のおでこをさするとたんこぶになっていた。

とりあえず先に向井から降ろしてアパートの玄関口に座らせた。問題は西条さんだ、彼女のマンションは隣なので連れていけないこともない、が、体中をまさぐって鍵を探すわけにもいかず、そもそも西条さんの住むマンションはオートロックの設備なんかも整っているせいで、僕一人では中に入ることもできない。

仕方ないので僕の部屋で一時保護することにして、ズルズルとタクシーから引きずり出し、何とか西条さんをおんぶした。

西条さんはびっくりするくらいに軽かったけど、それでも眠っている人をおんぶするのは難しい。ぐにやぐにやとバランスが悪く、おまけに僕はお尻やら触らないように気を使いながら、一段一段階段を登って三階の自分の部屋に付いた。

鍵を開けて中に入り、とりあえず西条さんをベッドに下ろした。でもそのままにしてはおけない、っていうのはまだ買って間もないベッドながらも既にそのうえで僕は色々と忙しく、トーキチ臭やらトーキチ汁的なものがシーツには多分に付着していて、おそらくトーキチ菌が大量繁殖しているに違いない。そんなところでこのお姫様を寝かせようものなら、一晩のうちに間違いなくトーキチ病にかかってしまい…それはむしろ好都合ではないか、ってそんな話はどうでもいい。要するに西条さんの衛生面とちょっと恥ずかしい僕の気持ちを気遣い、僕は机を寄せてベッドの隣に来客用の布団を敷いた。その上に西条さんをそっと寝かせたのだった。

ここまでの重労働と女の子に触れる緊張とでドツと疲れ、僕もベッドで寝てしまおうかと思った。もちろん向井のことを忘れていたわけではない。だがあの不憫な酔っぱらいと、自分の感じている面倒くささを天秤にかけて、面倒くさいほうに傾きつつあるだけである。

ほっておいても、そこまで文句を言われる筋合いではないと思いつつ、やっぱり少し可哀そうなのと、向井に貸しを作っておくと後々都合がいいに違いないのと、管理人さんに怒られると面倒なのとが複雑に入り混じった気持ちを抱え、僕はもう一度下に降りた。寒いのかして、外でガタガタ震えている向井を「行くぞ」と後ろから抱え上げて、立たせた。「…さ、さむい」とまだ半ベソをかいている向井に肩を貸して部屋まで連れ帰り、玄関を入ったところの床に傾がした。床で打ち捨てられている向井の上から座布団と掛け布団を放り投げて、僕の仕事は終わり、ベッドで眠ることにした。横になると今更のように酔いで頭がズキズキと痛かった。

ベッドの下を見ると西条さんが冬眠から覚めたけど、やっぱりまだ眠くてうとうとお昼寝している小熊みたいに眠っているもんだから、僕の中の下劣な精神が起きだしそうになった。僕は暗闇の中で上体をむっくり起こして、眠る西条さんを見つめた。

キスぐらいならいいよな…、いや、むしろ脱がして…触っても起きないんじゃないか…。

ドキドキがとまらない…、息が荒くなる…。西条さんは絶対に起きない…。

なんだか涙が出そうだ…、もう駄目だ…！

…やめた。何考えてんだ僕は。そんなのナイナイ、だって怖いじゃん、チューとかすんの。僕だってファーストキスだよ？酔っぱらった女にしめしめとするようなファーストキスは嫌だね、女の子よりもロマンチックなシチュエーションを百通りくらい考えてんだ、こっちは。ふっふ、西条さん、その罫にははまらんぜ。体だって触りませんよーだ、おやすみー。

そう、僕はさっき西条さんをおんぶしているときも、極力お尻とか、体の変なところを触らないように気遣っていた。あれは無意識で、きっとそういう変なことをするのが怖かったんだと思う。だって僕は童貞だし、隣で寝ている女の子は天使で、童話のお姫様で、小熊で、赤ちゃんみたいだったからだ。男にそういう変なことされるべき女の子じゃなかったからだ。

きっと飲み会で向井が西条さんを助けたのも似たような理由だったのだろう。僕だって、いま、僕から西条さんを助けたのだ。

とかなんとか考えているうちに僕は西条さんの顔を見ながら眠ってしまった。

僕の頭のうえ辺りでケータイから何度も「燃えよドラゴン」の着うたが流れてきて、ブルース・リーが「アチョー！」とうるさいので堪え切れずに。眼は眠ったままケータイを探り、布団の中から電話に出た。

「おお、起きたんかい」声の主は向井だった。「おはよう」

「…おはおう、いま何時？」目が開かない。

「十一時半くらいやな。昨日はホンマありがとうな、俺どうやってお前の部屋まで行ったんか全然覚えてへんわ」

「僕が一生懸命連れて行ったんだよ…」

「やっぱそうやねんな、ホンマありがとう。置き手紙して出て行ってんけど、机のうえ見た？」

そう言われた僕は机の方に寝がえりをうってメモを確認しようとした。

一緒のベッドの中で西条さんがすやすや寝てた。

思わず「うおっ」と大きな声が出てしまい、その声で西条さんが「…なあにー？」と目を覚まし、それに反応した電話の向こうの向井が「あれ西条さんまだ…」プツツ。僕はとっさに電話を切った、ケータイの電源も落とした。

おいおい、うそだろう？僕は昨日西条さんを僕の魔の手から救ったはずだ、ていうか僕の純潔は？どこいったの？一生の初体験を酔っぱらって覚えてないって…。僕は真剣に泣きそうになった。その顔を見て驚いた西条さんは「ど、どうしたんですか？」と目を覚ましたみたいだった。

「あの、えっと…西条さん？…僕って、昨日…」

そこまで聞いて状況を把握した西条さんは「ひゃああっ！」とベッドから飛び降りて、下に敷いてあった布団に正座した。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」僕を直視することもなく、土下座のポーズで謝り倒す西条さんを僕は「ちょ、ちょっと待って西条さん。まず落ち着こう、落ち着ついて、ねえったら」となだめたが全く効果はなく、むしろ次第に「ごめんなさい」が「ごべんばさい」になり「ごうえんわざい」になったのちに、わんわん泣きだしてしまった、どーすりゃいいんだ僕は。

僕は生れてこの方、泣きじゃくる女の子をなんとかしなくてはいけない状況に陥ったことはなく、したがって対処の方法は全く分からない。分からないけどそのまま放っておくには余りにも悲痛な声で泣きじゃくるので、とりあえず、僕は意を決してベットから降り、西条さんの肩を抱き、「大丈夫だから」と優しく囁く、という綿密な作戦を立てて実行に移した。

が、僕の手が西条さんの肩に触れた瞬間、「いやああっ！」と金切り声をあげて物凄い力で僕を振り払い、その勢いで西条さんの石後頭部が僕の顎を直撃、一瞬目の前が真っ白になり僕は西条さんの隣に崩れ落ちた、いわゆるノックアウトである。

テンカウントでも体に力が入らず起き上がれない僕の姿を見て、ようやく西条さんは自分が何をしているかに気づいたらしく「あああ、ごめんなさいトーキチくん、ごめんなさい！」と逆に僕の肩を抱いてくれた、キュン。

ようやく体に力が入るようになったので、とりあえず僕はベッドにふらふらと這い上がり、西条さんは布団のうえで正座し、しかるべき距離を保って状況を確認することにした。僕は帰ってきたそのままの恰好で寝てたし、西条さんだって昨日のお団子すらほどいていなかった。

西条さんは「本当に、何から何までごめんなさい」と改めて謝罪したうえで「たぶん夜中におトイレを借りたんです…」はうつむいて顔を真っ赤にしながら喋りだした。

「でもまだ私寝ぼけていて、もう一度寝ようといつものようにベッドに入ったんだと思います…。変だな、とは感じたと思うんですが、なにしろトーキチさんが入っていてベッドが暖かくて、そのまま眠ってしまって…ごめんなさい…」

そこまで言って西条さんはうつむいたまま完全に黙ってしまった。

かわいいから許す、ていうかごちそうさま！とはもちろん口に出さずに僕は。

「いいよいいよ、気にしないで。ていうか僕酔っぱらってたし、もしかして寝てる間に西条さんに変なことしやしなかったかと心配で…じゃあ僕は無実だね？」と聞くと西条さんは顔を真っ赤にしながら頷いた。よかったよかった、純潔は守られたのだ、二つとも。

その日は土曜日でまだ講義は始まっていなかったもので、遅刻するとかそういった心配はなかった、そればかりは本当によかった。

その後、ていうかまず、その日中に西条さんが「本当にすいませんでした」と、そそくさと帰ったあとで、そういえば向井からの電話をいきなり切って電源まで落としていたことに気付いて、電源を入れ直すと、案の定四回ほど着信があり、「向井です、何があったか知らんけど連絡ください」と留守電まで入っていた。

「おおやっとながった、トーキチ、いきなり切れたんやけど、どうしたん？」

「いや、電池切れちゃってね」僕は嘘をついた。

「そーかそーか、なんか西条さんの声も聞こえた気がするしなんやったかなと思って」

何故かドキッとした僕は「ていうか電話なんだったの」と僕は西条さんの話を逸らした。

「そうやそうや、いや、お前んちに忘れ物してへんかなと思って、ジッポライター。出る前にベランダで一服させてもらってんけど…」

ガラガラと窓を開けてベランダに出てみた。今日も快晴だ、早く起きて洗濯をすればよかったな、と思いながら見回すと、エアコンの室外機の上にジッポライターがあった。あったよ、と告げると、

「やっぱりか、そんならそれ、今から取りに行っていく」

「明日じゃダメなの？」

「俺それやないとタバコ吸うの嫌やねん、ほな今から出るわ」と一方的に切られてしまった、勝手な奴である。

三十分ほどしてドアがロックされたので出ていくと、向井と西条さんが立っていた、あれ？西条さん？先ほど出て行った西条さんはすっかり着替えて、髪形も変わっていた、オツケー、さっきのことには触れないでおくよ。

「悪いな押し掛けて」と、全く悪びれずに向井が笑いながら言った。「西条さんも連れてきてん」なんてだよ。

「あの、向井くんに「今からトーキチのそこ行くし、アレやったら一緒に昨日のお礼せーへん」と言われたので、是非と出てきました」と西条さんは何だか恥ずかしそうに教えてくれた。

「ちゅうわけで行くぞ、出れるか？」

無論、昨日外で飲んでいた恰好そのまま問題ないが「どこいくのさ」

「昨日言うてたやろ？学校の近くのケーキ屋や」

えー、またかよーと僕は笑って見せたが、西条さんの「いいじゃないですか、行きましょうよ」に後押しされて僕は靴を履いた。

「じゃあケーキでも食いながら、昨日の君らの醜態について事細かに教えてあげるよ、覚えてないだろうから」と僕がニヤッと笑いかけると、

「え、嘘、そんな酷かったん？」と向井は慌て、西条さんは顔を真っ赤にしながら向井に気付かれないよう、僕の服の裾を引っ張った。

いい天気だ、明後日から本格的に授業が始まる。僕は二日続けてのチーズケーキを、二日続けての友達と食べに出かけた。

早速、月曜日から講義が始まった。曜日によってまちまちだけど、だいたい日に3コマか4コマほど講義を受けて、夕方から向井と新歓コンパに参加する、帰る、寝る、という生活リズムで、受験からこっちまともな生活をしていなかったのでもちよつと辛い。まあ、高校の頃は朝練行って、丸一日授業を受けて、遅くまでハードル走を跳んでたことを思えば、ラクな生活だ。早い日も8時半に起きれば十分授業に間に合うし。

辛いといえば、講義がちよつとしんどい。そもそも別に文学が好きで入ったわけではなく、読書なんてのは教科書しか読んだことがなかったし、図書室に関しては使い方はおろか場所すらわからなかった。そりゃ国語は他の教科に比べれば多少得意だったけれど、何かの拍子にみんなが作家の話をしだすと途端についていけないレベル。だから平家物語だとか白樺派だとかの講義を退屈するのは仕方ないと思う。

とか言って開き直ってる場合ではなく、津久本先輩にも「一回生の前期で単位落とす奴は留年する確率高いらしいよ」なんていう嘘だか本当だかわからないようなことも言われたので、せめて卒業できるようがんばろうと思う、少なくとも一回生の春の時点ではそう思っている。

それに日文学科は人数も少ないし、専門科目が多いしで、同じ顔をたびたび講義で見かけるからお互いすぐ仲良くなれた。向井じゃないけど、同じ学科に友達が増えるとレポートのときとか助けてもらえそうなのでありがたい。これが経済学部や商学部だったら、一つの教室に人数が多すぎて誰が誰か覚えきれずにそうはいかないだろう、知らないけどそうだろう。

サークルの新歓コンパは、入学式のあと相談したように、大体が向井と一緒にだった。と言っても僕も向井も、別に何かやりたいことや入りたいサークルがあったわけではなく、大学生といえばサークル、みたいな感覚だけであちこちのサークルを見てまわった。フットサル、草野球、イベント系サークル、ゴルフ、カメラ、ボランティアサークル、映画研究会…、京都寺社巡りサークルなんていうサークルの新歓コンパも参加した。大体が木屋町通りの居酒屋か円山公園の花見広場で開かれ、僕たち新生の分は先輩達が出してくれるので、タダでたらふく飲み食いできた、僕が家で料理をしたのはホントに初めの二、三日くらいのものでした。

あと、向井が酒に弱いこともわかった。向井はビールをジョッキで一杯飲めば真っ赤になる、二杯飲むとグッタリしてほとんど喋らなくなる、三杯飲むとトイレに行き、それ以上飲ませると泣きだすのだ。以前の日文親睦会での醜態はたまたまではなく、彼は泣き上戸だったのだ、めんどくさい。酔いつぶれて「またこんななってごめんなあ…トーキチごえんなあ…」と泣きじゃくる彼をアパートに泊めたのが四回に達したとき、僕は目の届くところで向井が二杯より多くの酒に手を出そうとすると止めに入ることを決意した、それが僕にも向井にもいいと思う。

そうまでしていくつもの新歓コンパに参加してみたのに、向井はあまり目ぼしいサークルがなかったらしい。

「えー、でも昨日も女の子といっぱいアドレス交換してたじゃん」

昼休み、天気が良い暖かかったので、外のベンチに座って購買で買った弁当を食いながら、僕は向井と話していた。教室棟の脇にある、食堂や購買へと続く長い道の両側にあるベンチでは、

僕たち以外にも大勢の人が腰かけて昼飯を食べていた。のどかな春の風景だった。

「せやけど法学部やで？これから絶対接点ないやん、ひと月もしたら顔忘れるわ」

「何言ってるんだよ、接点ないからこそチャンスだろ、出会いを大事にしろよ、そしてその子を僕にも紹介しろよ」

と、いう僕の言葉に向井は「アホか」と言って笑った、おいおい、冗談じゃないぞ、本気だぞ。「じゃあ向井はサークル入らないの？」と僕は尋ねた。尋ねておいて思い出した。「そーいや津久本先輩から聞いたけど、研究会入るの？」

「まーな」向井は早くも弁当を空にして片づけていた。

「せっかく無理して大学入ったんやし、ちょっとええかなと思ってな。津久本先輩おもしろそうやし、世話になったし」

ふーん、と相槌をうつ僕に向井は「そういうトーキチこそどうすんねん、サークル」と尋ねた。

「僕…？そーだなあ、どうしようかなあ」

あちこちのサークルの新歓コンパで思う存分飲み食いをしておいて、特に目ぼしいサークルがなかったのは向井と同じだった。ていっても別に新歓コンパがつまらないわけではなく、サークル勧誘のためか先輩たちは親切だったし、同級生には同じような不安を抱える親近感があったし、初対面の女の子にはいちいち恋の予感を感じて、むしろ新歓コンパに参加するのは楽しい、タダだし。

でもそんな新歓コンパに二つ行き、三つ行きしてるあいだになんだかどこも同じに見えてきてしまったのだ、僕には。なんていうの？あれが大学生ノリっていうの？どこのサークルも同じような雰囲気、僕には特にやりたいことがないせいで、どこのサークルにするか、いまいち決め手を欠いていたのだ。

「いいんだよな、友達とかは、学科で作れそうだし」僕も弁当を食べ終わった。

「それやったら何かやりたいこととかないん？」

うーん、やりたいこと、やりたいこと、それがわかってれば苦労しないんだけどなあ。

「漠然とだけど、どうせ四年後には社会にでなきゃいけないんでしょ。だったら今のうちしか出来ない馬鹿馬鹿しいことをしたいんだけどなあ」

「馬鹿馬鹿しいことなあ、…キャンパス全部使って鬼ごっこしたらおもしろいんちゃう？」

そう言って笑う向井に「んなサークルねえよ」と僕はため息交じりに言った。

その時である、「んなサークルねえよ」と呆れた時である。僕たちよりも東側、すなわち食堂の方からいきなり、「逃げんなや！」「待てオイ！」という大きな怒鳴り声が聞こえてきた。僕も、向井も、周りのベンチに座っている人たちもびっくりして、思わず会話を止めてその声の方を見た。

何かが僕たちのほうへ向かって走ってくる。

そいつは物凄いスピードで食堂からの道を走りぬけてきて、僕たちがその姿に気付いた時にはすでに目の前、そして一瞬のうちに通り過ぎていった。あっという間の出来ごとだったので、何

が走り抜けていったのかよく見えなかったが、それは真っ黄色な半袖のシャツを着て、まだ四月だというのに膝もあらわな半ズボン穿いた男だったと思う。手にはよくわからない棒状のものをもち、なによりも特徴的だったことに、頭に黒いマスクをかぶっていた。

向井が「なんやあれ…」と言い終わらないうちに、マスクの男の後ろ姿は教室棟のどこかに吸い込まれていった。ベンチにいた人たちみんなが、ポカンとして男の消えた先を見ていると、男が来たのと同じ方から「ざけんなコラ」と声がしたのでまたそちらを見ると、別の男が二人ほど、こんどは普通よりちょっとチャライ程度の恰好の男たちが、怒りのせいだか極端にしんどいせいだか、鬼のような形相をして走ってきた。たぶんさっきの怒声の主だと思う。

でもその二人はギャーギャー怒鳴り散らしてくせに、先ほどのマスクの男とは似ても似つかぬ不細工なフォームでちんたら走り、息も絶え絶えの様子。姿が見えてから僕たちの前にもなかなか到着せず、あれじゃあ逃げ切られるのは間違いないな、と思って見ていた。

だけどよく見ると、その二人の後ろからまた別の影がぐんぐん追いついてきているのに気付いた。何？昼飯食った直後に走り回るのが流行ってんの？その影はあつというまにへなへなど走る男たちを追い越し、またしても一瞬で僕たちの前を横切り…、と思ったら僕たちの前でいきなり立ち止まった。その姿は、一瞬小柄な男かと思ったら、髪を短く切った、赤ぶち眼鏡の女の人だった。

女の方は息を切らしながらキョロキョロし、僕たちの姿に気付くと、
「あの変態、どっち行った!？」

と、人に訊くのにそんなに怒鳴らなくてもいいじゃないか、と思うような口調で尋ねてくるもんだから、突然のことにビビった僕と向井はろくに口も利けずに、教室棟のほうを指差した。女の方は「ありがとう」のあの字もなく、僕らの指差した方へ走り抜けていった。一方男二人は結局僕たちの前まで到達せず、すこし手前で膝に手をつけて息を切らせていた。なんだったんだ、あれ？

授業が始まるまで、向井とあの謎の鬼ごっこの正体について話しあってみたけれども、答えなんて出るはずもなく、結局、授業を受けているうちにうやむやになってしまったのだった、あるのどかな春の日に起きた事件、僕はその事件について、後日もうすこし詳しく知ることになる。

それから二、三日経ったある日、僕はあるサークルの新歓コンパにひとりで参加することになった。いつもだったら一緒に来る向井は、何やら津久本先輩に研究会の件で呼ばれたらしい。まあそりゃ、心細いといえば心細いが、向井はああして研究会に入ることを決めたらしくサークルに興味を失っているようだし、僕だって別に女子高生じゃないから向井がいなくたって寂しくて死んじゃうことはない。大体、向井と一緒に参加するとはいえ、別々のテーブルで飲み食いしてることがほとんどなので、別に一人で参加したところで状況は変わらない。むしろ介抱を心配してやる必要もなくなるので好都合かもしれない。

一緒に講義を受けた友達と「じゃ」と別れ、僕は校門近くの集合場所へ向かう。大体の新歓コンパはこうして先輩達がサークルの看板を持って新入生を待ち受け、右も左もわからぬ子羊の群れを引き連れて会場まで連れて行ってくれる。今日の新歓コンパもそのパターンで、どこのサークルだっけ…あれだ、僕はオレンジの台紙に黄色い文字で「パルプフィクション」と書かれた看板を目指した。

地下鉄を乗り継ぎ、ちょっと歩いていつも通り木屋町にたどり着く、ここ最近しょっちゅうこの辺で飲み食いしてる気がする。十人くらいの新入生と一緒に連れられて向かったのは、おしゃれつつうのか、若者好みの？僕の地元にあったらみんなが警戒して逆に流行らないような？シックな外観の創作ダイニングのお店だった、なんだよ創作ダイニングって、洋食？居酒屋ではないの？

ぞろぞろと通された薄暗い掘りごたつの個室座敷には、すでに先輩達が二十人弱くらい座って待っていて、僕たち新入生はバラバラになって空いた所に腰を落ち着けた。うしろの方からくっついていった僕は、入り口近くの男の先輩ばかり四人座っている、新入生が一人もない席についた、ついてない。

僕が座るとすぐに先輩達が飲み物の注文を聞いてくれて、僕はウーロンハイをお願いした。先輩達は先に頼んでいたのか、目の前にビールのジョッキがあったけど、待ちくたびれた泡はもう消えていた。

飲み物が来る間先輩達は「何学部？」「出身どこ？」などと、気を使ってきているんだか尋ねてくれて、僕の方も他のサークルで千回はしゃべってるので慣れっこになった、通り一辺倒な会話をしてるうちに飲み物がきた、他のみんなの分もきた。

奥の方に座っていた男の人が全員に飲み物がいきわたったことを確認し、多分あのちょっとやぼったい感じのするメガネの人が部長さんだな、その部長さんらしき人がジョッキを片手に立ち上がった。

「えー、新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。それと今日は僕たち「パルプフィクション」の新歓コンパに参加してくれてどうもありがとうございます。今、うちの学校にはフリーペーパー系サークルは他にもいっぱいあるけど、他のサークルに負けないよう、ぜひみんなに入ってもらって誌面を盛り上げていきたいと思っています。今日は楽しんでいってください。それでは乾杯！

かんぱーい。

かんぱーい、はいいいけど、ぶっちゃけ僕はこのサークルがどんなサークルかよくわかっていなかった。ほうほう、フリーペーパー系サークルか、で、何それ？というようなことを、多少丁寧な言葉に変えて、近くの先輩方に聞いてみた。

教えてもらったところによれば、「パルプフィクション」は先の部長さんのあいさつにあったとおり、フリーペーパー系のサークルらしい。フリーペーパー系のサークル、要するにフリーペーパーを発行するのを活動とするサークル、みんなに「ペーサー」と呼ばれているのは、「パルプフィクション」以外にも大小いくつかあって、それぞれでフリーペーパーを作っている。その中で「パルプフィクション」は今の部長が二代目の、まだ比較的新しいサークルだとか。

じゃあ古いサークルは、と聞くと、有名なサークルが三つあって、まず、生協や大学主催のイベントを告知している「総和大情報誌ライフ編集部」と体育会の活躍を伝える「体育会広報部」。この二つは、もともと母体が大学の広報組織で、それが部活動になったサークル。「言論表現研究会」は学生運動が盛んだった時代にはうちの大学の学生運動の先陣を切っていた伝統あるサークルで、今はアンケートやコラムを通じて「学生を取り巻く社会問題を論じ」ているそうだ、よくわかんないけど。

で、この三つのサークルは先輩曰く「特別」で、なんで特別かというと大学の認可を受けた団体であるからだ。大学の認可団体はそのほとんどが体育会運動部で文化系団体は数えるくらいしかない。その数えるしかないくらいの文化系認可団体のうち三つがペーサーっていうのは、いかにうちの大学にその手のサークルが多いかということだ。

認可団体の何がいいかと言えば、まずオフィシャルなメディアとして学内で幅をきかせられる、大学から結構な額の部費が出る、購買で売ってもらえる、などの点で、ていうか「購買で売って」たらそれフリーペーパーじゃないじゃん、と思うのだが一応ペーサーらしい、すごく安いらしいし。

じゃあ逆になにが悪いんですか、と先輩に尋ねると「記事がつまらない」という言葉が返ってきた。認可団体であるがゆえの安定して、きちんとした情報で構成された誌面は、悪い意味でお利口さんな、どこことなく偉そうな記事ばかりになってしまうのだ。「ライフ編集部」と「広報部」については特に顕著で、もともとの出自がそうだから仕方ないっちゃ仕方ないのだが、大学主催のイベントの実行委員や体育会のエースなど、ごく一部のオフィシャルっぽい人たちがばかりにスポットがあたる。「論表研」はもともとが反体制から出発したサークルなので多少マシだけど、今となっては大学からの認可をもらい「おほほ」と笑っている。よく教授との対談をやってる点を「攻めの姿勢がない」と先輩たちは指摘していた。

それに対し、認可団体以外のペーサーの多くが何に重点を置くかということ、認可団体が書かない記事、つまりオフィシャルっぽい人たちならぬ、そこらの学生を主役にした記事を取り扱うのだ。あるペーサーは学内スナックを売りにしてるし、別のペーサーは京都の学生向けグルメに力を入れている。コラムだって堅苦しいものではなく、ごく普通の一般学生が書いた、え？それみんなに言うことなの、というレベルの雑事が掲載されていたりと、認可団体のものに比べると記事のクオリティは低く、作りは雑だが、親しみやすいものが多い。

だが一口に認可団体以外のペーサーといっても多種多様、規模などにも差があり、たくさんのライターを抱えて充実した誌面を作れるところもあれば、年に二回程度発行するだけのところもあり、別の大手のペーサーはひとつのサークル内で何誌かに編集部を分けているようなところもあったりと、内情は様々である。

おまけにペーサーの特徴として次々に新しい団体やフリーペーパーが生まれては消えていくことを、先輩達は挙げていた。ほんの二、三号出して休刊するフリーペーパーや、「記者募集」のポスターを貼ったまま創刊しなかったペーサーも数多くある中で、我々が「パルプフィクション」がたかだか二年と少しの新興サークルながら、創刊以来、コツコツ定期発刊していることは結構すごいことらしい。

「うちのフリーペーパーは他の文化系サークルの記事が多いな。演劇サークルとか映画サークルとか、上演前に取材して、リハーサルとか試写とかに参加して記事書くねん。やからそれぞれ担当するサークルとかあったりして、そこのサークルの人とも仲良くなれるとこがおもしろいかな、…こいつなんてそれで彼女作ったんやで」

なにそれ、超うらやましいです、詳しく教えてください、と色々聞きながら、けっこう興味深く色んなサークルの内情なんかを聞いていると、突然、個室のドアが開いた、ガラッ。

入ってきたのは小柄な女の人だった。僕はどこかで見たことあるような気がしたが、広い学内、その姿を見かけたこともあるのだろう。彼女は入るなり大きな声で「ごめーん、ちこくしたー」と笑いながら挨拶して、他の部員から「遅いわアホー」「連絡しろやー」と野次られて、またエヘへと笑った。

それからキョロキョロ座るところを探して、結局僕たちのテーブルの一角、僕の目の前、別の先輩がトイレに行って空いてるところに「よっこらしよ」と座り、店員さん呼んで「生中！」と注文した。

「ふう」、注文してから僕の姿に気付いたらしく、隣に座っている男の先輩に「あの子新入生なん？」と聞いた。そしてまた僕の方を見て「よろしくな」と言った。言うてからハッと何かに気付いた顔をした、え、そんなに僕好みだった？

「あたし、君見たことあるわ」あれ、ホントにナンパ？

隣の人に「原田お前いきなりナンパかよ、手が古いよ」と笑われた彼女は隣の肩をたたきながら「ちやうってー」と笑って否定した。違うのか、残念…。

「えーっと、ほら、アレやん、三日前くらいやったかな、あたしが変態追っかけてた時、ベンチで金髪のおっきい子とおったやろ？覚えてへんかな」

と、そこまで言われておもいだした、あの時の赤いメガネの女の人だ、すごい勢いでマスクの男を追っかけていた。「そうそう、それ」と言ってまた笑った。

「あんとき、あの変態がどっち走って行ったか君らに聞いたやんな？」

「はい、覚えてます。あれ、追いつけたんですか？」

「あかんかったわー、あのままどっか行ってしまっただけ見失ってん」

赤いメガネの先輩は残念そうにそう言って、目の前のポテトをひとつつまんだ。隣の人と「ほんとに逆ナンじゃないんだ」「ちやうって、会ったやんなー？」とか言ってる。

「ていうかアレやな、あたし原田っていうねん、今年三回生やな、よろしく」とポテトをつまんでいた手をおしぼりで拭いて差しのべてきた。僕も握手して「新入生の工藤です」とあいさつすると、隣の先輩が「あだ名はトーキチなんだって」というから、「トーキチです」ともう一度あいさつした、原田先輩は「どっちやねん」と笑った。

ぐいぐいとビールを飲む原田先輩の様子を観察すると、こないだ見たときと同じく、縁の赤いセルフフレームのメガネをかけていた。髪色の明るいベリーショートもそのまま、なんかこう、元気いっぱいって感じ。ていうかそんなことは割とどうでもよく、とにもかくにも僕目をチラチラと離さなかったのが、そのはちきれんばかりの、元気いっぱいなおっぱいであった。

その日、原田先輩は紺色のジップアップのパーカーを着ていたのだが、そのジッパーが胸のせい一番うえまで上げると窮屈らしく途中までで止まっており、その下に来ていたキャラクターTシャツも横に伸びてしまい何のキャラクターかわからなかった。不可抗力と言えど目の前に座る女性の胸をギラギラと注視するわけにもいかず、かといって男に生まれた以上目を離せるわけがなく、結果意気地なしな僕はチラチラと盗み見ていた、それをつまみに何杯でも飲めそうな気がした、実際その日は結構飲んだ。

「あたしなー、いま弟子募集中やねんけどトーキチくんどう？」

いきなり話しかけられてびっくりした、邪魔しないでほしい、僕はいまあなたの乳を盗み見しているのだから。

「あ、え、弟子ですか？」乳に気を取られていたことに気付かれないよう、僕は慌てて返事した、え？弟子？

「そうやねん、弟子。弟子っていうか、アレや、取材のアシスタント。インタビューしてる間に写真撮ってくれたり、記事のアイディア出ししてくれたり、おったらいろいろ助かんねん。うちのサークル大体の人が何人かでチーム組んで記事書いてるし、あたしも誰か手伝ってくれたらなと思ってな」

それを横で聞いていた別の先輩が「やめといたほうがいいよ、原田のアシスタントなんかしたところで死ぬほどこき使われるうえに結局原稿は没になるんだから」と茶々を入れると原田先輩は「やかましわ」と、またその先輩の肩をたたいた、関西弁で言うなら、どついた。

「でもまだこのサークルでお世話になるって決めてないんで…、もし入ることになったら、そのときお願いしますね」という、僕の極めて模範的な社交辞令に原田先輩はそれと気付かなかったのか「うん、一緒にやろーな」とにっこり笑った、なんて強引なおっぱい女だ、許してしまいそうだ。

そこまで聞いて僕はさっきの話をふと思い出して、原田先輩に聞いてみた。原田先輩はハイペースでビールを飲んでいて、もう三杯目が空になっていた。

「ところで取材って、こないだ全力疾走してたあんなようなのですか？アレって、結局演劇サークルのパフォーマンスーマンズの取材かなにかだったんですか？」

原田先輩は一瞬何の話に飛んだのかわからない顔つきをしたが、すぐにそれと気付いた。

「ああ、あの変なマスク被ったのが走って行ったやつ？あれは演劇サークルのパフォーマンスちゃうし、あたしが追っかけて行ったのも取材ちゃうで、あたしの趣味やねん」

「趣味ですか？」

「せやねん、あたし個人的に糞新聞追っかけてんねん」

出たな、糞新聞、しばらく忘れていたワード。前に聞いたのは…津久本先輩だけ？

「あたしの勝手な予想やけど、あの騒ぎは多分糞新聞の仕業で…アイタツ！なにすんねん！」としゃべり続けようとした原田先輩は隣の先輩の妨害にあつたらしく、そっちを睨んだ。たぶん太ももかどっかつねられたらしい、僕にも触らせてほしい。

でも睨まれた先輩は逆にちょっと怒った顔をして、原田先輩に小声で、でも強い口調で「おい、新入生に糞新聞の話なんてしてんじゃねーよ」と言っていた。

怒られた原田先輩は、ちえっ、と拗ねて「ごめん、なんでもないわ」とぐいぐいと四杯目のビールを飲んだ。

そういえば峰岸先輩も糞新聞の話をされるのが嫌いだと、津久本先輩が言っていたのを思い出した。どうやらこの学校において糞新聞を嫌っている人もいるらしい。そしてどっちかということ、まともそうな人ほど糞新聞が嫌いなんじゃないかとうっすら感じた、根拠はなかったけど。

「んで、トーキチくんは学部どこなん？あれ？さっき聞いたっけ」と原田先輩に聞かれた、まだですよ。

「僕、文学部なんですよ」

「文学部か、学科って結構あるやんな、英文とか哲学とか史学とか」

「学科は日文学科です」

その言葉を聞いた瞬間、ビールを飲みかけた原田先輩の手が一瞬止まった。で一口飲んでから「…そうなんや、珍しいな」とジョッキを丁寧に置いた。何？その反応。

「トーキチくん日文だったんか、じゃあ津久本っていう…トーキチくんのイッコ上のやつ知ってる？」と別の先輩が話しに割り込んできた。

「知ってますよ、時間割作ったりお世話になりました。…もしかして津久本先輩もここのサークルなんですか？」と、気になって逆に尋ねると、

「いや、あいつは一時期ちよっとうちのサークルにいてどっか行ったんだよ、別のペーサーかな？まあ何にしろ、ちよっくらいうちにも顔出せって言うておいて」と言われた。原田先輩は四杯目のジョッキも空にしていた。

ペーサーか、おもしろそうだな。トイレで用を足しながらちよっと考えた。色んなところに顔を出して話を聞いて記事を書く、いいじゃない、今だって似たようなもんだ、色んなサークルの新歓コンパに参加して先輩達の話しを聞く。それを記事にするかしないかの違い。僕はこの頃になって気付いたのだけれど、結構こうやって初対面の人と会って話をするのが楽しい。話しの内容は新鮮だし、知らないことを教えてもらえるのは一種の快感だ。さっきの「ペーサー勢力図」みたいな先輩の話も面白かったし。ここのパルプフィクションもいいけど、ちよっと他のペーサーも覗いてみようかしらん、ジャー、トイレを流す音。

手を洗ってドアを開けると、ドアは向こう側に立っていた人にぶつかり「あいてっ」と声が出た。ああ、ごめんなさいごめんなさい…原田先輩じゃないですか、空きましたんでトイレどうぞ。

「あ、トイレちやうねん、ちよっとな、トーキチくんに用があつてな」先輩はおでこをさすりながら言った。

「僕ですか？」

「そうやねん、トーキチくんやねん」

原田先輩は酔っぱらってるせいかしてトロンとした目つきをしている。そのトロンとした目つきで下から見上げて、

「あんな、ふたりでもう一軒付き合ってくれへん？」と言った。

…え？なんて？

おいおいおいおい、何？やっぱり原田先輩僕のこと気になってた？いやー参っちゃうなー、そうですよね、いきなり僕の目の前に座った時点で気付くべきでしたよね、「前に会ったことあるよね？」なんて常套句ですよ、いやー。あんな、もう一軒付き合ってくれへん？…やっぱー、女の子の関西弁やっぱー、アレだ、超萌える、萌えー、原田先輩萌えー。いいですよ行きましようよもう一軒、それで二人で気持ち良く酔いましようよ、終電？気にしなくってもいい

ですよ、僕の部屋泊めてあげますし。え？やだなー、そんな照れないで下さいよ、「もう一軒」とかそのつもりだったんでしょ？とぼけちゃってー、かわいいなーもう！おっばいおっきいなーもう！えへへ…。

「…あ、えっと、…こんないきなり言ってもあかんよなあ」という先輩ちょっと慌てた声で、僕は一旦現実に戻された。いかんいかん正気を失うところだった、努めて冷静にだぞ、トーキチ、冷静に、ピークール、ピークールトーキチ、オウイエース！

「あ、いや、ちょっとびっくりしちゃって」と、僕はにかんだような笑みを浮かべつつ「でも先輩とならよろこんで」ニコッ、完璧！

「ほんま？ええの？ありがとう」と原田先輩ははしゃいだように僕の腕をとった。ちょっと先輩、肘に胸が当たってますって、ちょっと先輩、…もっと先輩！

会場からぞろぞろとみんなで帰る途中、僕はふと「…あ、店に忘れ物したんで取りに行ってきます。みなさん先帰っててください」と一人集団を離れて先ほどの店に戻ると、店の前には原田先輩が待っていた。もちろん僕には忘れ物なんてあるはずもなく、まあ原田先輩自身が忘れ物、みたいな、えへへへ。原田先輩に言われた通りに僕は集団から抜け出して戻ってきたのだった。

「ほな、いこっか」

原田先輩は僕の腕をとって夜の木屋町を歩きだした、気付かれないように、かつ最大限肘で原田先輩の胸の感触を楽しめるように意識を集中させながら歩いていると、少しして先輩は「ここやで」とボウリング場の向かいにある雑居ビルの前で立ち止まった、どこだここ？

エレベーターで三階に上がった先にあったのは、小さなバーだった。バー、といってもベストを着て蝶ネクタイを締めた紳士がシャカシャカとシェイカーを振るような落ち着いたのではなく、狭い店内には酔っぱらった学生たちがひしめきあい、ガヤガヤと騒いでいた。

テーブルはどこもふさがっていたけど、カウンターが空いていたので、原田先輩と僕は並んで席に座った、僕が左側。店自体が小さいのでカウンターも当然狭く、狭いくせに椅子がたくさん並べられてるから、腰かけた僕と原田先輩の肩がもうすこしで触れそうになった。

カウンターの向こうからびっくりするくらいに綺麗なお姉さんがおしぼりとコースターをくれて、原田先輩に話しかけた。

「サキちゃん、男の子とくるの久しぶりじゃん」

サキちゃんと呼ばれた原田先輩は「ちょっと、いらんこと言わんでええねん」と照れたように笑って「シャンディガフひとつ」とメニューを見ないで注文した。

「そっちの子は？」とお姉さんがとろけるような笑顔を向けながら僕にメニューを渡してくれた。色んな種類のカクテルがあって、なんたらハイみたいなものしか飲んだことのない僕には味や見た目の想像がつかなかったので、変な名前のオリジナルカクテルから「赤い彗星」というのを注文した、三倍酔いが早く回るのだろうか。

他にも原田先輩はチョコの盛り合わせだのカマンベールチーズ生ハム巻だのと、知った様子で注文していたので僕は「よく来るんですか？」と聞くと原田先輩は「ちょこちょこな」と言った。

飲み物はすぐに来た。原田先輩が「トーキチくんの入学に」とグラスを持ちあげたので、僕は「ありがとうございます」と乾杯した。赤い彗星は何のカクテルかよくわからなかったけどシソの香りがした気がする。原田先輩は一口で半分くらい飲んでしまっ、「は一」と気持ちよさそうに一息ついた。

「ごめんな、急に連れ出したりして」原田先輩はグラスを置いて言った。

「いえいえ、むしろうれしいです、ほんと」ほんと。僕は距離が近いせいかなんとなく原田先輩をまともに見るのが憚られ、グラスに浮かぶ赤い液体に視線を落とした、さっきの店から数えて何杯目だ？

「トーキチくん、お酒強いん？」

と、原田先輩が若干こちらに身を寄せつつ、僕の顔を覗きこむようにして聞いてくる。

「あ、ええと、どうなんでしょうね、飲むようになったの大学入ってからですし、えっと、でも、僕の友達なんかは二杯か三杯くらい飲むとぐでんぐでんになりますね、それと泣きだすんです、めんどくさいです」

僕は何で向井の話しなんてしてんだろう。なんだか喉が渇いて、目の前のカクテルを一口、グイッと飲んだ。そんな僕の姿を「いいね、いいね」と原田先輩がニコニコして見ている。自分の顔が赤い気がする、やっぱ酔っぱらってんのか？僕。

「あたしも結構お酒好きやねん、なんかフワフワーって楽しくならへん？」

そう言いながら原田先輩も一口飲んで、ふう、とため息をつき、とろんと瞼を閉じて「フワフワー」と言いながら体を左右に揺らしていた。揺らしていたかと思うとこちらへ揺れた拍子に、僕の肩に頭を載せてもたれかかってくる。おいおいおい、何？何コレ？スパゲッティじゃなくて、踏み台昇降運動じゃなくて、モン・サンミッシェルでもなくて…何コレ？え？不意にズボンが膨らむ様な気がして、僕は慌てて、かつ気取られないようシャツを下にグイッと引っ張っておいた。

そんな僕の動揺はよそに、目を閉じた原田先輩はその姿勢のまま「酔うわー」と口元で笑っていた。どうすりゃいいんだこの状況は。うれしい、うれしいけど困る、と目をキョロキョロさせているとカウンターの向こうの綺麗なお姉さんと目が合っ、お姉さんが「ウフフ」みたいな感じで笑うので、また恥ずかしくなって僕はカクテルを飲み干してしまった。

僕がカクテルを飲み干すと、原田先輩は僕にもたれかかっていた体を起して「あたしも飲むー」と半分近く残っていたグラスを干してしまった。僕がその様子を驚きとともに見守っていると、原田先輩は飲み干したグラスを置いて「お酒おいしいなあ？」とこっちを向いて言うのでまともに目があってしまった。おおお、恥ずいぞ！と慌てて僕の目の前に立てかけてあったメニューに目を逸らした。

そのメニューを「次なに飲もかー？」と原田先輩が身を乗り出して取るもんだから、ていうか取るなら近いほうの手で取りゃいいものを、向こう側の手で取るもんだから、いきおい原田先輩の姿勢は僕の側面に対し正面を向く格好になり…ええい、要するに僕の右腕に一瞬、原田先輩の大きなおっぱいがまともに押しつけられたのだ！どうだ！参ったか！ええ、参りました。

メニューを取ってそれを眺める原田先輩の距離は依然近いまま、先輩の頭は僕のすぐ鼻先にある、シャンプーの匂いが残ってるのかなんかしらんけど激烈にいい香りがした、するような気がした。ドキドキしながら僕もメニューに目を落としてしていると、またしても不意に「トーキチくんは？」と赤いメガネがこっちを見るものだから、至近距離で目があってしまった。

「はい！…はい、僕ですか、そうですね、何がいいでしょうね。っていつても僕カクテルなんて全然飲んだことなく、ウーロンハイとかレモンサワーとかビールくらいしか知らないんですよ、ほら、居酒屋のチェーンにあるようなのばかりしか。でもこんなにお酒の種類あるってすごいですね、なんていうか、おしゃれですよ。いやーおしゃれすぎて僕には向いてないのかなあ、あはは、どうしましょう、何飲んだらいいんでしょう」いわゆるパニックだ。

「ほなあたしが頼んだらそれにしたらええわ」とニヤッと笑って、「ユキちゃーん、あたしレッド・アイで、この子キール作ってー」と綺麗なお姉さんに注文した。

目の前にグラスが出てきたのでまたしても「かんぱーい」。原田先輩がグーツと飲むので、つられた僕も出されたキールとやらをグーツと飲んだら思ったより強い酒で少し涙目になった、

なんちゅうもんを注文してくれたんですか、と馬鹿なことを思いついたので酔いに任せて言おうと思って原田先輩の方を向くと、原田先輩は小皿に盛られたチョコレートとつまんで包みを開けている最中であり、こっちを向いた僕に気付いて「ん？」という顔をしてから、何かに気付いたみたいな顔して笑い、包みを開けたチョコを僕の口に近付けるもんだから、思わず僕が口を開けると、その中にチョコを放り込んでくれた。死ぬほど甘くて一発で虫歯になるかと思った、でもさっき思いついたことをどうしても言いたかったのでチョコを噛み砕いて飲み込み、

「なんちゅうもんを注文してくれたんですか、強い酒じゃないですか」というと、原田先輩は、「今さらすぎやろ、ていうか駄洒落で」とケラケラ笑って僕の肩を叩いた。

それで少し打ち解けて、僕の緊張も少しずつほぐれ、サークルや学校の話をする原田先輩に、僕が時折無意味な冗談を挟むと、原田先輩は「アホか」と笑いながら僕の肩をたたき、それがちょっと病みつきになって僕は繰り返し馬鹿なことばかり言っていたと思う、仕方ないよ、酔っぱらってたんだから、もちろん原田先輩に、ってね！「アホか」、えへへ。二人ともお酒もおかわりした。

気付くと、原田先輩の手は「トーキチくん結構手ぇ大きいなあ」とかいう話をしながらテーブルの上の僕の手にもたれかかっている間にやらさっきみたいに原田先輩は僕の肩にもたれかかっていた。

でも僕はというもうガチガチに緊張することはなく、むしろ、こりゃヒャクパー僕のこと好きだね、みたいなことや、チューってどのタイミングでするんだろう、ていうか部屋綺麗にしてあったっけ？なんてことを考えていた。もはや余裕を乗り越えて完全に調子こいていた、なんかの拍子に「で、結局先輩なにカップなんスかあ？」とか聞きそうになるくらいには調子こいていた、むしろ今にも聞こうとしていた。

「で…」と僕が言い出すのと「そんでな…」と原田先輩が口を開くのは同時だった。原田先輩は僕にもたれかかっていた頭を起こして「なに？」と聞いたけど、僕も原田先輩の顔を見てちょっと我に返って「先どうぞ」とうながした。原田先輩は「そんなら…」と話しだした、手は僕の手にもたれかかまま、うへへ。

「なんで今日トーキチくん誘ったかっていうとな、アレやねん、言ったやろ、あたしのアシスタントなってくれへん？って」

そういえばさっきの飲み会で言っていた気がする、新歓コンパで。原田先輩と話しているのが楽しすぎてメインだったはずの新歓コンパはずいぶんと前の時間のような気がする。でも覚えてますとも、おぼろげながら。

「さっきの新歓コンパのときもしかしたらこの子いいかも、って思って誘ってん、ふたりで話してみたくってな。そしたら何て言ったらいいんやろ、頭の回転が速い…っていうか、人に気持ち良くしゃべらせる才能があんねん、トーキチくんには」

突然褒められだしてなんだか尻の座りが悪くなった僕は、「そんなこと言われたことないですよ」と苦笑いした。

原田先輩は「あたしが言ってんやで、間違いないわ」と笑って「そういう人がアシスタントや

ったらきつといい記事作れると思うねん、どうやろ？」と聞いてきた。

「いや、どうやろ、って言われても僕記事書いたりしたことないんでよくわかんないですけど…でも原田先輩にそこまで言ってもらえるのはうれしいです、…お世辞とかそういうアレ…ですか？」

それを聞いた原田先輩は、重ねた手に少し力を入れて、でも眼はテーブルにある空のグラスに向けてちょっとうつむいた。

「トーキチくんはどう思ってるか知らんけど、結構あたし勇気出したんやで？こうやって飲みに誘ったり、ほぼ初対面なのにアシスタントやれへん、って言ったり。トーキチくんにはそんな、わからへんかもしらんけど、お世辞でそんなんするわけないやん」悲しそうな声で言った。

そんな悲しそうな感じで言われて慌てた僕は「あ、いや、そういうつもりでなくって…」と取り繕おうとしたが何とっていいかわからず「えっと」「なんていうか」を繰り返すばかりだった、こないだ人生初めて泣きじゃくる女の子をなだめてみた僕に、この状況で気の利いたことが言えるはずがない。

でもそんな僕を知ってか知らずか、原田先輩は僕の手の手甲の上に重ねていただけの手で、僕の手をひっくり返して指をからめて握った。

「あたし、トーキチくんやから誘ってんねんで？一緒にやってくれへん…？」

そう言って原田先輩は手を握ったまま、こまったように眉毛を寄せて、でも眼は熱っぽく僕を見上げていた。その眼を見た僕のなかで、何かが決壊した。はい、よろこんで、原田先輩と二人三脚で記事を作って行きたいです！そう喉まで出かかった時だった。

店の便所から誰か出てきた、便所はカウンターの奥側、僕から見ると原田先輩越しにあった。なんで誰か出てきたことがわかったかという、僕は便所を気にしていたから。なんで気にしていたかっていうと、そりゃ便所に行きたかったからである。

はっきりいって、いま結構小便がしたい、それを我慢している。じゃあ便所に行けよ、という話なのだが便所に行かずに膀胱に負担をかけている。

なぜか。原田先輩である。現在僕史上最大に女の人とイイ感じであり、出来ればこのまま記録を更新し、加えてあわよくば結果も残したいと思っている、絶好のチャンスである。だが悲しいかな、このイイ感じは僕が演出したものではなく、言ってみれば雰囲気の賜物、お酒の賜物に違いないことは自惚れ屋さんの僕でも分かる、チャンスだからこそ冷静な観察眼は必要だ、ピークール、トーキチ。

なので万が一にも「ちょっと憚りに」なんつって用を足しに行けば、その間に雰囲気も酔いも少なからず醒めてしまう可能性が高く、僕が便所から戻ってきて「さ、もう一度頭を預けてごらん」と肩をツイと出してみたところで、この甘い空気が生まれるかどうか。

水風呂を思い出してほしい。「ウーツ」と浸かって、しばらくは身動きをしない。なぜならじっと我慢しているのに身動きをして水をかき混ぜてしまえば、また冷たい思いをしなくてはいけないからだ。僕もなるべく身動きしないようにしている、雰囲気をかき混ぜないように。まあ、要するに童貞特有の臆病さが、僕の尿意の開放を阻んでいた、便所にを気にさせていたという、身も蓋もない話である。

気にしていたから、原田先輩に手を握られながら熱っぽく見つめられていても、便所から人が出てくるのがわかった。ついでに誰が出てきたのかもわかった。

なんで津久本先輩がここにいる。

黒いハットと上半分の黒ぶちの眼鏡、変な柄のシャツ、擦り切れたジーンズ、足元の雪駄、まちがいなく津久本先輩だった。

なんでここにいる。

トイレから出てきた津久本先輩はうーん、と伸びをしてから首をまわした。それからふう、と気を抜くとカウンターの方へ目をやった。やばい、見つかる、ととっさに目を逸らしたが既に遅く、もう一度津久本先輩の様子をうかがうと今度こそ目が合った。津久本先輩はニヤニヤ笑いながらこちらを見つめ続けている。

原田先輩も、自分がこんなに熱っぽく見つめながらお願いしているというのに、僕が明らかに他に気をとられていることに気づき、僕が目線の方を振り返った。その時原田先輩がどんな顔をしたかは見えなかった。でも津久本先輩の様子は見えた。原田先輩が振り向いた瞬間、津久本先輩は地獄の入口の方でちよろちよろしているパシリの小鬼が、新しい生贄が来たと聞いてニタァと喜ぶ様な顔をした。と、同時に、原田先輩はスス…と僕の手を握っていた手をカウンターのテーブルの下に隠した。

なんで津久本先輩がここにいる。

津久本先輩の登場はどう考えても僕にとって都合が悪い、そりゃそうだ、さっきまで僕の手を

汗ばむほどに強く握っていた原田先輩の左手はいまやテーブルの下だし、原田先輩に気付いた瞬間の津久本先輩の邪悪な笑みは、原田先輩と津久本先輩が悪い意味で知った仲だということに他ならない。いい雰囲気だったのに！トイレまで我慢してたのに！しかし今となってはどうもならない、津久本先輩がそのままの嫌な笑顔でこちらに近づいてきて、原田先輩の隣の席に座った。

「いっやー、こりやまた珍しいものを見ましたね、原田さん。…あ、ユキさーん、僕キューバ・リブレ作ってくださいーい」

座るところか注文までしくさりおって、津久本先輩はしばらくこの席に居座る気らしい。原田先輩はがっかりとうなだれていた。え？この状況そんなにマズいの？ていうか二人はそんなに仲悪いの？

「最悪や…なんで津久本ここにおるん…？」原田先輩がテーブルを見たまま津久本先輩に問いかけた。

「僕ですか？文学研究会の新入りを連れてきたんですよ。でもベロベロになっちゃって、便所で介抱してたんですが、なにしろ手に負えないし他の先輩たちはいつの間にか消えてるし、面倒になったんでとりあえず放置してきました」

それでトイレから出てきたのか。津久本先輩の前に飲み物が置かれた。「ユキさんありがと」と言って津久本先輩は一口飲んだ。

「で、原田先輩とトーキチはここで何してるんですか？…デート？」

「ちゃうわ！」原田先輩が津久本先輩を睨みつけた。え？違うの？遠からず近からずと思ってたのに…。そんなに強く否定しなくても、と僕は少しショックを受けた。

「あれや、サークルの、パルプフィクションの新歓コンパの帰りや！同じ高校出身ていうことが分かって意気投合して飲んどんねん！」

「どう考えても無理がありますよ、大阪弁と尾張弁が同じ高校って」津久本先輩のツッコミは正しい。

それに対し原田先輩は「やかましわ！あたしは高校の二年まであっちやったの！」と力技で押し切ろうとしている、無茶がありますよ。

「工藤、本当のところはどうなの？」

津久本先輩のニヤニヤ笑いが原田先輩をとび超してきた。原田先輩もこっちを向いた、ていうか何でそんな怖い顔してるんすか。さっきの熱っぽい目とは打って変わった、冷ややかな目つきだった、傷つくなあ、でも怖い。

「…ま、まあそんなとこですね、高校の先輩だったらしいんですよ、っていっても原田先輩は二年で転校しちゃったらしいんで一緒に同じ学校にいた期間は何かったんですけどね。でもアレですよ、僕の同級生が原田先輩の仲良かった女の人と付き合ってたらしいことも分かって盛り上がってたんですよ」咄嗟にいらぬ嘘をついた気がする。

ふーん、と津久本先輩はニヤニヤしているがそれ以上追及するのは辞めたのか、勝手にテーブルの上のチョコレートをつまんだ。

ふと何かを思い出したように、津久本先輩は原田先輩を見た。

「そーいえば原田さん、今週の糞新聞手に入りました？」

糞新聞？

「いや、まだ見てへん。津久本持ってるん？」

「つっても、ほんの切れっ端だけなんですけどね」

津久本先輩は上着のポケットをガサガサと探り、折りたたまれた紙片を取り出した。

「僕の手元に回ってきたのはこれだけです、まあ近いうちに全部集まるとは思うんですけど」

津久本先輩は原田先輩の目の前にその紙を広げた。

糞新聞、名前だけ聞いていたその本物があると聞いて、僕は原田先輩の肩越しに覗きこまずにはいられなかった。ただし本物ではなく、どうやら糞新聞の一部をコピーしたものらしく、まともに読めそうな記事は一本しかなかった。

そのコピー用紙を見るなり原田先輩は「やっぱりや」と声をあげて、僕の方を振り向いた。

「やっぱりあたしの言った通りや、ダースベイダー事件は糞新聞がらみやで！」

原田先輩は津久本先輩の手からコピー用紙をひったくって、僕にも見せてくれた。「ダースベイダー卿天誅！」のタイトルから始まる記事は、僕たちの前を走り去って行った変質者がしでかした事件について、微に入り細に穿ちレポートされていた。写真の男は確かにあの日物凄いスピードで走っていたマスクの男である。一面記事らしく、コピー用紙の右上には大きな文字で「糞新聞」と新聞の看板が書かれていた。

記事を読み進めるにつれて、僕にはある思いがこみ上げてきて、読み終えてから改めて写真を見るとその気持ちが思わず声に出ってしまった。

「胡散くせえな」

僕が思わずポロっと言ってしまった言葉に、原田先輩は「え？なんて？」と反応した。僕は、変なこと言ったかなと心配になりつつ「あ、いや、なんとなくですよなんとなく、理由とかはなくて…」と答えると、

「すばらしい、工藤」津久本先輩が口を開いた。

「その直観力はすばらしいよ、非常にグッド」と言って津久本先輩は親指を立ててウィンクをした、古い。

「せやで、記者の第一歩は、他人の記事は全て疑う、やで、トーキチくん」原田先輩まで津久本先輩みたいにウィンクした、可愛い。

二人の先輩に褒められた僕は、「いや、そんな、思ったことをなんとなく言っただけで、別になんにも考えてないですよ…」と照れて見せると、原田先輩に「確かに何も考えてへんみたいやけどな」とダメ押しされた。

「トーキチくんと一緒に、あたしもこの記事は胡散臭いと思う。たぶん、この記事の記者とカメラマンはダースベイダー男のタレコミがあって食堂で待ちかまえてたんやと思う、ターゲットも知らされてたんやろ」そう言って原田先輩は目の前のカクテルを飲みほした。

「それとな、あたしにはいっこ面白い情報があんねん」

ニヤッと笑う原田先輩に僕は「情報ですか？」と聞かずにはいられなかった。

「せやねん。このダースベイダーな、他にもちよこちよこ目撃情報はあつてん、それも糞新聞絡みで」

僕は写真の中の変質者に目を落とした。

「ていうかその前にトーキチくん、糞新聞の流通の仕方知ってる？」

「え、他のフリーペーパーと一緒に食堂とかに置いてあるんですか？」

「そんなんしたら糞新聞を嫌ってる人たちに即行で撤去されちゃうよ」

と、津久本先輩が割り込んできた。

津久本先輩が説明してくれるところによると、糞新聞の特徴の一つはその流通の仕方である。通常、多くのフリーペーパーは学食や購買、もしくは地域の飲食店などに置いてあり、読者はそれを勝手に持って行くシステムになっている。だが糞新聞の場合は先ほど津久本先輩が言ったとおり、大学当局からは目をつけられていて学内に置き場がないうえに、アンチも多いので飲食店などに置く方法をとってもほとんどが人の目を見ずに撤去されてしまう。

そこでどうするか。

「ある日突然、いきなり隣のやつに話しかけられるんだよ、新聞買いませんか、って。講義を受けてる最中に隣に座ったヤツだったり、図書館で本を探していると声かけられたり、電車で座っていると目の前の吊革につかまってるやつが、っていうパターンもあるらしいね」

その、買いませんか、という新聞が糞新聞だというのだ。

「でもそれって怪しすぎませんか？見ず知らずの人から新聞なんて買うんですか」

「それがな、この話、うちの学生やったら割とみんな知ってる話やから、ああ糞新聞か、って言って結構買う人おんねん」と原田先輩が答えてくれた。

それはそれで納得したが僕には新たな疑問が湧いた。

「まあ、みんなが買ってくれるにしてもそうやって一部ずつ売ってたら効率悪すぎませんか？」と津久本先輩に聞いてみた。

「いや、売るのはせいぜい何部か、実際ひとケタくらいの部数じゃないかな」

え？そんなの流通するわけじゃないじゃん、という僕の顔を読みとったのか、津久本先輩は続けた。

「それをこうやってみんなでコピーして回し読みしたり、噂で流れてきたりして広がって行くんだよ。そうすれば糞新聞が好きなヤツらには流通するし、嫌いなヤツらの目には触れないで広がって行くんだよ」

要するに、糞新聞の原本とも言うべき初めの何部かはごく少数が、いきなり声をかけられて見ず知らずの人から売りつけられるらしい。売る金額はまちまちで、五十円から千円までの開きがあるとか。

その原本を手に入れた人たちは、コピーをしてみんなに配ったり、もしくは原本を買った値段より高い値段で売ったり、はたまた気味悪がって誰かにあげてしまったり、最悪な場合は糞新聞のアンチに渡るとその場でビリビリに破いて棄てられることもあるらしい。

なので確実に手に入れられる方法というのはないため、熱心なファンはアンテナを高くして、誰が原本なりコピーなりを持っているかを探し、記事を読むのだという。

津久本先輩は「記事もさることながら、そういう変な楽しみがあるところも糞新聞のカルト的人気を支えてるんだな」と嬉しそうに語った。

「そんでさっきの話に戻るで」原田先輩が僕の方を見た。

「ダースベイダーの目撃情報ですね」

「そう、ダースベイダーはどこで目撃されとったか。ずばり、ダースベイダーに糞新聞を売りつけられたって話を何件か聞いたことがあってん」

「てことはダースベイダーは糞新聞の関係者ってことですか？」

「あたしはそう思って、走り去るダースベイダーを追っかけてん。とっ捕まえて聞きだしてやろうと思ってな。…結局逃げられてしまったけど」

原田先輩は悔しそうな顔をした。

「じゃあこの事件自体、糞新聞が起こして糞新聞が記事書いて、それってアレですよ…なんて言ったか…」

「自作自演？」津久本先輩から助け船が出た、そう、それ。

「せやねん、しかもこの記事だけじゃなくて、いままでに他にもたくさんこういう自作自演くさい記事がいっぱいあんなん」

「無茶苦茶じゃないですか、自分たちで人に迷惑かけておいておもしろおかしく記事にするなんて」

「だから糞新聞は嫌われてるんやな」

原田先輩の言葉になるほど、と僕は納得した。

「関係者を捕まえてインタビューかなにかしたら大スクープやと思ってんけどなあ…」そういつ

て原田先輩は悔しそうな顔をして、記事に目を落とした。

「捕まえて、はいいですけど、そんな神出鬼没くさい人たち捕まえられっこないんじゃないですか？」

僕がそういうと津久本先輩は

「あれ？工藤まだ見たことない？学校で袋叩きにあってるやつ」

と物騒なことを言いだした。

「あるわけじゃないじゃないですか、そんな学校に住んでる野良猫みたいな言い方やめてくださいよ」

「いやいや、結構あんねん、それが」原田先輩まで話を合わせ始めた。

「糞新聞でハタで読んでる分にはおもしろいやん？でも自分が記事のターゲットにされたら最悪やろ？」

「そりゃそうですよ、食堂で飯食ってるところにテーブル蹴り上げられたら最悪です」僕は自分がベイダー事件に巻き込まれるところを想像した。

「やろ？しかも糞新聞の記事はそれだけちゃうねん。もっとえげつないサークル内のゴシップとかもバンバン書きよんねん」

大学サークルのゴシップ…どんなえげつない記事なんだろう…。

「やから基本的に糞新聞の記者は見つかったら袋叩きにされるな、特に体育会をターゲットにして捕まったら悲惨やで」そう言う原田先輩の目はマジだった、マジなの？

「この時期はどこのサークルも動きが多いから糞新聞は大活躍するだろ？そのぶんあちこちでリンチにあってるやつも多いだろうに。工藤、やなもん見ずに済んでよかったな」津久本先輩はニコリ笑った。

「…じゃあ、もしあのダースベイダーが捕まってたら…」

「まあ酷い目に遭わされたやろうな。せやけどあんな挑発的なマスクして今まで無事っぽいし、もしかしたら結構曲者かも…」

「ウヒヒ、余計に燃えますね、原田さん」

「ほんまやで、そうとうおもしろい話聞けたやろうに…」

正直、僕はこの二人がどこまで本当のことを言ってるか見当もつかなかった。いきなり突きつけられるフリーペーパー…、人から人へアンダーグラウンドで自己増殖する…、内容は下世話なゴシップやスキャンダル…、記者は正体がばれると血祭りにあげられる…、ダースベイダーのマスク…。にわかには信じ難かった。

ただ、目の前にあるこのコピーは本物だった。僕だってこの不審者は目撃したのだ、この目で。ということはつまり、この学校にはこういう馬鹿なお祭りを年中している人たちがいるのだ。命懸けの鬼ごっこ。僕は少しだけ興奮した。それと同時に、この糞新聞の底知れなさが少し怖かった。

「それにしても、結局なんで原田さんと工藤が飲んでるんすか？」

「だからさっき言ったやろ！あたしとトーキチくんは高校の先輩後輩で…」

「だからさっき言ったじゃないですか、無理があるって」

原田先輩は「ううむ」と一瞬押し黙ったが、すぐに「どうでもええやん」と強引に笑い飛ばした。

「…また原田さんなんかよからぬことを企んでますねえ、…まあいいや」

そう言って津久本先輩はグラスに残った最後の一口を飲み干し、

「んじゃ僕帰りますわ、原田さん、工藤、お疲れっした」

と、ひらりと立ちあがった。立ちあがって歩きだそうとして、ふと何かを思い出したように僕のほうを見た。

「あー、それと工藤、ひとつ忠告」

「なんですか？」

「君、原田さんに誘惑されて籠絡されかかってたから教えてやるけど」

「はい」

津久本先輩は真剣な表情になった。

「原田さんの、偽物だぞ」

その言葉を聞くや否や「コラてめえ津久本！」と、立ちあがった原田先輩の胸を僕は思わず見てしまった、プルン。

「アホなこというな！正真正銘の本物や！」ちょっと原田先輩、両手で持ち上げないで、鼻血出るから。

そんな激昂する原田先輩を見てゲラゲラ笑いながら津久本先輩は、

「僕に言わないで下さいよ、ホラ、工藤が疑いの目で見てるじゃないですか」と僕を指差した、え？僕？

「ちよ、なんなん！？トーキチくんまで津久本の言うこと信じるん！？…よっしゃ、なんやったら触ってみいや！わかるから！」

と、両手で胸を持ちあげながら僕の目の前にずいと突き出した。

急に訪れた僕史上最も（同世代の）女性の胸に近づいた瞬間に、「え？あ？えっと？…は？」と勇気も定まらず動揺を隠せずにいると、まだゲラゲラ笑って目に涙を浮かべたままの津久本先輩が、なんとか笑いをこらえながら言った。

「いやいや、無駄ですよ原田さん、だって工藤童貞だもん、触ったってわかりっこないですよ」

「ちょっと！いらんこと言わないでくださいよ！」

津久本先輩の突然の暴露に、原田先輩もさっきの怒りはどこへやら「え？」とニヤニヤ笑ってこちらを見た、なんだこの恥ずかしさは、プレイか。

「え？トーキチくん、ホンマなん？」

「いいじゃないですかそんなの！どうだって！」

「だって津久本がそう言うから…」

「津久本先輩！なんで僕までとぼっちり…」

と、文句を言おうとしたら津久本先輩がいなくなっていた、逃げた？なんで？

「あ！」原田先輩が気付いた「あいつタダ酒飲みよった！」

津久本先輩は自分が飲み食いした分をしれっと原田先輩と僕に押しつけて、どさくさにまぎれて帰って行ってしまったのだった。

突然現れて突然消えて行った津久本先輩。なんだか気が抜けてしまって、ちょっと気まずいのは片や「偽乳」片や「童貞」と言い捨てられた僕たち二人で、っていうか原田先輩偽乳なのだろうか、なんで僕さっき勢いで触らなかったんだろう、と悔やまれるけど、原田先輩はなんか考えながらお酒飲んでるしそんな雰囲気ではない、非常に惜しい。僕も黙ってお酒を飲んだ。

先に口を開いたのは原田先輩だった、「あんな、言っとくけどな…」なんでしょう、胸の話だろうか。

「むしろ気をつけなあかんのは、津久本やで」原田先輩はこっちを見ずに言った。「あいつのほうがよっぽど怪しいわ、なに考えてんのかかわかれへん」

「同感です」僕はあまり深く考えずに、とりあえず同意した。

「やろ？一時期うちの、パルプフィクションにおったのも聞いたやんな？」

「はい、さっきの飲み会で誰か言ってました」

「せやねん、そんでな、どうも同じ時期にあちこちのペーサーにもおったらしいねん。同時進行やで？しかも一回生のくせに、普通やったらそんな度胸ないわ。何考えとんねん、て感じやな」

津久本先輩ってそんな人なのか、と僕はちょっとショックを受けた。っていうのは、僕の中ではちょっといい加減だけど面倒見のいい愉快なお兄さん、というイメージであって、こんな真剣に人に疑われるっていうのは何かしら後ろめたい雰囲気がにじみ出てるんだろう。まあ原田先輩もちよっと酔っぱらってるみたいだしあまりマジに受け取らなくていいんだろうか。でもそんなこと言われてしまったら、否が応にも僕の中で持っていた津久本先輩＝面倒見のいいお兄さん、というイメージに少し影がさす。

だから余計に「とはいっても、いいやつやねんけどな」という原田先輩の言葉に、少し救われた気がした。

「それにしても」原田先輩がため息をついた。

「作戦失敗や」

「作戦？」え？なんですか、それ？

「津久本にバレてしまったなあ」

「作戦ってなんの作戦ですか？」

「あれや、トーキチくん使って津久本を調べられへんかな、と思ってる。日文である程度面識があるんなら上手いことスパイにでもできへんかなって」

「それ、僕を利用しようとしたってことですか！」

僕の抗議に対して原田先輩は「そういうことやな」とニッコリ笑った。なんてこった！でもかわいい！

「悪いなあ、でも津久本にあたしらが一緒におるとこ見つかってしまったし作戦失敗や」

「じゃあ僕が原田先輩のアシスタントになる件もナシですか？」

ちよつとがっかりした僕の問いかけに、原田先輩は「うーん」と考えて、
「でもトーキチくん、おもろいし頭も良さそうやし、アシスタントになってくれたらうれしい
なあ。あ、でも無理には言わへんで、うちのサークル入るかどうかも決めてへんみたいやし。
でも入るんならあたしと組もうや」
と、言ってもう一度につこり笑った。

「ほんならあたし帰るわ」と原田先輩が荷物を持って立ちあがった。

僕は「帰っちゃうの？」と訴えかける捨てられた子犬のようなせいいっぱいのかわいい目をして、それが伝わったのかはわからないが、原田先輩はちょっと困った顔をして「終電やねん」と言った。

「トーキチくんはもうちよい飲んで行くん？」

「いや、僕も結構酔っぱらいましたし帰りますよ」

「そっか、そしたら駅まで送ってや」そう言った原田先輩の目が色っぽくて慌てて目を逸らすと「トーキチくんちよろいなあ、かわいいわ」と原田先輩が笑った、おもちゃにされている僕、でも悪くない。

照れくさそうに笑いつつ、いじめないでくださいよーと立ち上がった瞬間、津久本先輩の登場ですっかり遠ざかっていた、先ほどの尿意を思い出した。

「…ちょっとトイレいいですか？」

「ええよ、店の外で待ってるわ」

うんこしてると思われぬようにさっさと済ませてしまおう、とそそくさと店の奥のトイレに行きドアを開けた。

なんで向井がここにいる。

ドアの向こうには便器を抱えてぐったりしている向井がいた。ゲロを吐いて顔を洗ったのか知らないが、口元とシャツの胸元が濡れている。あと目じりに涙の跡があるが、また酔っぱらって泣いたのだろう。何度か見せつけられた、最悪の状態の向井がそこにいた。

なんで向井がここにいる、と考えてみたところ、思い当たる節がある。なぜか僕と原田先輩の甘いムードに突如現れた津久本先輩である。このトイレから現れた津久本先輩は、研究会の新入りがトイレでベロベロになって云々と言っていた。ベロベロの研究会の新入りとは、間違いなし、目の前の向井である。

童貞だの偽乳だのと僕らをかき乱して姿を消した津久本先輩であったが、てっきり飲み代を誤魔化したものだと思っていた。しかし本当の狙いはこの向井であった。面倒な向井の介抱を偶然居合わせた僕に押しつけて逃げたのだった。

見なかったことにしよう。僕は極めて冷静に判断した。僕は原田先輩を駅まで送り届けるという使命を仰せつかったのだ。こんなゲロまみれの金髪の巨人を介抱している場合ではない、見なかったことにしよう。僕はそっとトイレを後にしようとした。

が、何者かに足首をガツシと掴まれ、というかどう考えても掴んだのは向井なのだけれども、分かっている僕もヒツと短い悲鳴を上げた。恐る恐る振り返ると半分正気の向井が、捨てられた子犬のような目をして僕を見上げていた。

仕方ないのでなんとか向井をトイレから引きずり出して、お店の人に手伝ってもらって背負って外に出た、お代はすでに原田先輩が払ってくれていた、なにも言わずに。原田先輩かっこいい、僕かっこわるい、向井もっとかっこわるい。

「トーキチくん…それどうしたん？」

僕の背中の向井に驚いた原田先輩に僕は、

「無責任な飼い主がトイレに捨てて行っていたので保護しました」

と、答えておいた。

「ダースベイダーのときトーキチくんの隣におった子？」

「そうです、向井って言います、どうやら津久本先輩の弟子になったっぽいです」

「うわ、最悪」と原田先輩は笑った。

駅のあたりでタクシーを拾うことにして、原田先輩と夜の高瀬川沿いを下った。

「ほんまに送ってくれてありがとうな、いろいろあったような気がするけど楽しかったわ」

「いえいえ、僕の方こそごちそうになっちゃってありがとうございます」

「ええねん、しっかり体で払ってもうらうし」

原田先輩はニヤリとわらった、その眼は色っぽさはなく非常に打算的な光り方をした。

「でもほんまに弟子の件、考えてくれるとうれしいな。トーキチくん褒めたのもほんまお世辞とかちやうし、一緒に記事作れたら楽しそうやもん、な？」

そう言い残して、原田先輩は駅の階段に消えて行った。僕は向井を連れてタクシーで家に帰った。

それからしばらく後の話である。

パルプフィクションの新歓の後も様々な新歓コンパには行った。が、あまりグツとくるサークルはなかった。なんていうか、原田先輩の姿がチラつくのである。あのキュートなショートカット、ちょっと色っぽいメガネ、鼻にかかった声、そしてはちきれんばかりの胸。色恋に疎い僕は年上のお姉さんの色気にクラっときてしまっているのだった。

でも原田先輩が気になるのはその容姿だけではなかった。もちろんその豊満なバストは気になって仕方ないところであるが、僕が気になっていたのは、彼女が話していた内容である、つまり糞新聞である。

その写真が学生生活を破滅させる、その記事がサークル間の紛争を勃発させる、そのライターであることがばれたら袋叩きにされる。そんなヤバそうなフリーペーパーの正体を原田先輩は暴こうとしている。なんて楽しそうなんだろう。

ほかのペーサーがやってるみたいに、学内ファッションリーダーとか、購買売れ筋ランキングとか調査してる場合じゃない。みんなが見て見ぬフリをしつつ見たくてしょうがない糞新聞の正体を暴くだなんて、危険で甘美な響きに満ち溢れている。そんなことを考えているから、いまいちパルプフィクション、ていうか原田先輩以外に対して積極的に興味が持てないのだろう。

というわけで、僕が徐々に新歓に興味を失って行くのと、四月も終わりに近づくのとでそのころにはあまり新歓コンパに顔を出さなくなっていた、いきおい自炊も増える。と、偉そうなことを言ってみただけど、ぶっちゃけ僕の自炊は文字通り米を炊くだけで、あとはスーパーのお惣菜とか、せいぜい野菜炒めなどである。

その日もお惣菜のタイムセールを狙って、アパートからほど近い行きつけのスーパーで買い物をしていた。卵の値段を見ながら、やっぱり都会は物価が高いなあと通り過ぎようとする後ろから、トントンと肩を叩かれた。一瞬、万引き犯と間違われたかとギョツとして振り向くと、女の子に「こんばんは」と声をかけられた。西条さんだった、びっくりさすなよ。

「トーチくんも晩ご飯の買い物ですか？」

「う、うん、まーね」

「へー、今日の晩ご飯は…」西条さんが僕の買い物かごを覗きこんだ、しまった、キャベツとか卵とか放り込んで料理できる男を装えばよかった。僕の買い物かごには値引きシールの張ってある揚げ物と野菜ジュース、それとポテトチップスしか入っていなかった。

「へへ…料理はできないんだけどね」

僕は苦笑いをしながら西条さんの買い物かごをチラと見た。

「お、今晚はカレー？」

「わ、私もあんまり難しい料理はできなくて…」西条さんも恥ずかしそうに笑った。

「いいじゃんカレー、超おいしいじゃん、僕大好きだよ」

「ほんとですか？」

「うん、死ぬまで何かひとつしか食べれないとしたらカレーを選ぶね、何杯でもイケる」

カレーライスへの愛を熱く語る僕を見ながら、西条さんはちょっと何かを考えてこう訊ねた。

「じゃあ、うちにきて一緒に食べませんか？」

え？

「私いつでも作りすぎちゃうんですよ、食べきれないくらい」

え？

「…あ、あの、味の保証はできないのでもし迷惑だったら…」

そういう西条さんの心配そうな顔で僕は我にかえった。アホか西条！迷惑なわけあるか！アホは僕だ！

「ほんと？いいの？行く行く、西条さんの手料理食べたい！」

「あ、いや…そんないいものじゃないので…」

またまた、そんな。期待するなと言う方が無理だ。ていうかこの際味はどうだっていい、女の子の手料理である。しかも人生初の女の子の部屋で…え？西条さん部屋に上げてくれるの？

「…あ、でも部屋に上がっていいの？」

と、西条さんに僕が遠慮がちに聞くと、意外にも彼女はあっけらかんと、

「いいですよー、でもあまり綺麗じゃないのであっちこっち見ないでくださいね」と笑った。

その屈託のない笑顔に対して、薄汚れつつも繊細な僕のハートはちょっとだけ傷ついた。以前に眠りこけている西条さんと事故とはいえひとつベッドに同衾しながら一晩なんの手出しできなかつたヘタレ、と高をくくられているのではと複雑な気がしたのだ。しかし警戒されて「やっぱダメ」と言われるよりは数百倍マシだと言い聞かせた。多分マシなんだ、きっと。むしろそんな様子を見せたら即襲ってやる。無理だけど。

そんな僕の邪念は「じゃあ今日はいつもよりおいしく作れるようにがんばりますね」というピュアッピュアな西条さんの言葉にかき消された、そして少し自己嫌悪した。

西条さんのマンションは僕の学生アパートのすぐ隣にあって、景観法だのなんだのと厳しい京都にあってどこをどうしたのか、十階建てオートロック完備で管理会社の警備が二十四時間体制で常駐している。ふつう僕のような男が玄関先でウロウロしていたら駆けつけた警備員に「ちよつとこちらへ」とどこぞへと連れて行かれ、翌朝、全裸で縛りあげられた状態で堀川今出川の交差点に転がされて冷たくなっているに違いない。だがしかし、僕は西条さんの部屋の番号を知っているのだ、内側からオートロックを開けてもらえるのだ、へへん。

マンションの入り口から中に入ると、ピカピカの玄関だけでワンフロアあった。おそらく自動ドアなのだろうが、前に立ってみてももちろん開かず、マジックミラーになっているため中の様子も分からない。どうしたものかとキョロキョロしてみると、壁に操作パネルがあった、かっこいい。その操作パネルに西条さんの部屋番号を入力しインターフォンを押してみるとチャイムが鳴り、少ししてスピーカーから「…はい。トーキチくん？」と西条さんの声がした。わかっちゃいたけど少しびっくりした。「あ、はい、トーキチです、工藤です」そしてなぜか敬語になる僕。「いま開けますねー、迎えにいきますからロビーで待っててくださいねー」という声がしてオートロックが開いた、ウィーン、かっこいい。

ばっちり監視カメラに見送られながら中に入ると、ドアの向こうは本物のホテルみたいなロビーが広がっていた。ちょっと落とした明かりが照らす空間には、大きな花瓶に花が活けてあるし

、床も絨毯張りだし、簡単なシャンデリアらしきものもぶら下がってるし、談話室みたいなソファまである。ていうかマンションのロビーでくつろいでどうすんだ、完全に無駄じゃねーか、早く部屋に入れよ、入れてもらえよ、と思いつつも西条さんが降りてくるまで待ってろ、と言われてるので、部屋に入れてもらえない僕はロビーで待機することとなった、早く入れてもらえよ。

チン、とエレベーターの止まる音がして、僕はロビー隅のエレベーターに目をやる。しかしドアが開く様子はない。なんでだ？と思っていると、「STAFF ONLY」と書かれた扉の向こうから「おまたせしましたー」と西条さんが出てきた。

「あれ、西条さん？スタッフ？」

と、戸惑う僕に対し西条さんは、

「えっとー、これはですねえ…エレベーターの中でお話しますよ、とりあえずどうぞどうぞ」と言いながら「STAFF ONLY」の中へ招き入れた。

ドアの向こうにはエレベーターが一基設置してあるだけであとは階段しかなかった。西条さんの後ろからエレベーターに乗り込む。なんの変哲もないエレベーターであるが、よく見るとボタンが「L」はロビーのこととして、あとは「11」の二つしかなかった。十一階？下から数えたら十階までしかなかったぞ？先ほどの「STAFF ONLY」といい、ボタンが二つしかないエレベーターといい、なんだこれは。西条さんに訊いてみよう。

「えっと、このエレベーター、ボタンが二つしかないけど…」

「そうなんです、直通エレベーターなので」西条さんはこともなげにそう言って「11」のボタンを押す、ドアが閉まりマス。

「実はこのマンション、親戚の会社が管理してるんですよ」上昇するエレベーターの中、西条さんが言った。

「十階までは普通のお客さんにお貸ししてるんですが、最上階だけ身内で使ってるんです、ちょっと前まで親戚のお兄さんが住んでらしたんですよ。それで、今年からわたしが京都の大学に進学することになって貸していただいたんです。…他に選択肢がなかったともいえますけどね」

そう言って西条さんはテヘ、と笑った。チン、エレベーターの止まる音。